# 川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.317

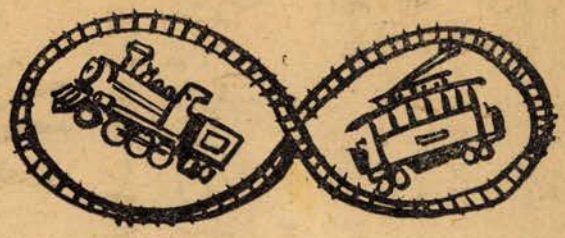
十月號

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿八年十月一日發行第八卷第十號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷三百十七号

# 十月号目次

（昭和二十八年）


題字……麻生 路郎
表紙……米田三男之介
川柳を通して語る二号の種々相……路郎・亜鈍・豆秋・没食子・文蝶・潮花……（四）
足踏すな……麻生 路郎……（三）
川柳の歴史……福田山雨楼編……（二七）
楽しめる古川柳……藤本 満年……（二二）
不勉強振りを顧みて……北川 春巣……（一六）
新川柳鑑賞……麻生 路郎……（二四）
パチンコ……須崎 豆秋……（一八）
役所と役人……八木摩天郎……（一四）
うなぎ……藤本 茶々……（二〇）
人間横丁（Ⅵ）……東野 大八……（二三）
鉄洲近く……（二四）
鉄洲句抄……（二五）
平清盛（一）……冨士野鞍馬……（二三）
大万川柳ベストテン……（一五）
★
不朽洞句帖……麻生 路郎……（七）
近作柳樽……麻生路郎選……（一六）
川柳塔……麻生路郎選……（八）
同舟近詠……諸家……（一五）
一路集「弁当」……中島生々庵選
「手紙」……大鶴 喜由選……（一六）
各地柳壇……（二九）
不朽洞会から……（三四）
柳界展望……（二八）
編輯局にて……（三四）



# 足踏すな

麻生路郎

久しぶりに形水君を訪ねたら、「足踏すな」と云う横額が、同君の仕事をしている部屋の正面に懸けられてあつた。

額はこの新らしい家にふさわしくないほどに古びていたが、私はそれをなつかしく見上げた。

「これだけは焼けませんでした」

と戦禍にあつた形水君も、私と同じようにその額を見上げて云つた。

文字は右横書きである。商家に懸けられた額として「足踏すな」は一寸異例な文字である。

日支事変が起きた直後だつたと思う。形水君は多年勤務していた店を主家の諒解のもとに去つて独立営業を開始された。その時に、何か書いて下さいと私に求められた。こんな時に書く文字と云えばたいてい「努力」だとか、「誠実」だとか、「繁昌」だとか「独立」だと云うような文字が書かれているが、それではあまりに月並みである。そこには、求めている人への誠実さがない。そこで私はこの「足踏すな」を書いて、心から形水君の前途を祝福したのであつた。形水君が心からよろこんでくれたことは、戦災にあつても、この額が持ち出されていることによつても知られるのである。形水君が月並な商人だつたら、おそらく、「足踏すな」なんて意味は兎も角として、変な額だと云つて、いつのほどにか、押入れの隅へ突ッ込んでしまい、戦災で灰にしていたであろうと思う。

私のうれしく、なつかしく思つたのは私の心をこめて書いた額が、いつまでも残つていたと云うことではない。額を単なる装飾と考えないで、額中に書かれた文字を箴言として戦時中は云うまでもなく、戦後の多難な業界にあつて、常に一歩々々前進を目指して来られたことを知つたのが、うれしかつたのである。

「足踏すな」は私が心から形水君の前途を祝福して贈つた言葉には違いないが、同時に私自身へのいましめでもあつた。形水君に対して「足踏すな」と云う以上、私自身も足踏みしてはならないことを心に誓つた。

「足踏すな」は形水君や私だけの問題ではない。オール川柳人の創作に対しても、常にそうありたいことを私はのぞんでいるのである。

## 川柳を通して語る

# 二号の種々相

麻生路郎　高鷲亞鈍　須崎豆秋　市場沒食子　土井文蝶　丸尾潮花

**春巣**＝皆さん大体おそろいになつた様ですね。豆秋さんは残業で少し遅れるそうですから、ぼつ〳〵始めて頂きましようか。

**路郎**＝では私から話そう。私は久し振りに此の座談會に顔を並べることにした。と云う訳はテーマを「川柳を通して二号の種々相」としたからで、此の題目は人によつたら聊かふざけたもゝの様に考えられはしないかと思つたからです。戰後の日本には非常に二号が殖えて居ります。人間が生きて行く上には、人心の落ちつきが必要だと思うときに、男女の数が非常にかけ離れた場合には（大戰による男子の戰死の如き理由で）洋の東西を問わず、何れの國に於ても一夫多妻式に、二号さん又はその類似の現象があらわれるものです。そして川柳に於てそう云う現象がどう現われるか、そう云う人達の心理がどう動くものであるかと云うことを研究して見るのも徒事ではないと思うのです。

**文蝶**＝大体現在は二号を置くと云う人の範囲が非常にひろがつた。一口に二号さんと云つても、その階級にピンからキリまであつて、一方には

**二號邸の方へは電氣冷**
**藏庫**　（七面山）
**伏魔殿めく大臣の二號**
**邸**　（弓削平）

と云う豪勢な二号さんがあるかと思うと一方には

**氣の毒に二號が薬を喰**
**べていた**　（谷　水）

と云う様な貧弱な二号さんもある。こんなのは今の新語で「軽妾」と云われている。この軽妾と云う言葉は、法学博士のKが或る女と月五千円の契約で関係を結んでいたのが、女が問題を起した事から、昨年八月二日の毎日新聞の記事になつたので表面に出たのであるが、この程度の二号さんの事を軽妾と云うのです。

**路郎**＝その記事の中に軽妾と云う言葉が書いてあつたのですか。

**文蝶**＝多分そうでしよう。何でもそれから軽妾と云う言葉が、流行し出したのですから。週間読賣の調査ではこの軽妾の九割までが女事務員で、腕達者な者になると会社の重役を二人も三人も持つているのがあるそうです。

**路郎**＝パン〳〵のオンリーと同じようなものだなア。

**文蝶**＝その式ですな。それで彼女達の人世観はと云うと凡てを物質で割切つていて、昔の「お囲い者」とか、「日蔭者」とか云う哀れつぽさがなく、頗る朗かなものです。結婚する迄の小遣い稼ぎをして、人世を樂しくと云う処でしよう。これも時代の変化ですな。

**路郎**＝然しそう云う軽妾がそれ以前にもなかつた訳ではないが、その数が非常に増えたと云うことは主として経済関係がそうさせたのだと思う。昔は安妾と云つていたが、然しその安妾にしても、たとえ二階借でも家を旦那の力で借りていたものである。今日云う軽妾は家などは問題でなく、金銭関係だけが軽妾たらしめている。その点が昔の安妾と違う処だが、矢張り二階借でも旦那の力で借りた処へ住んでいるのでなければ二号とは云えないのではあるまいか。

**文蝶**＝そう云う意味から云えば情婦だな。

**路郎**＝金だけやつて何処かで逢う程度では情婦の方に近いだろうね。尤も情婦は金銭契約だけでなく、むしろ女の方から貢いでいるのもあるからその点は違つているがね。此処で僕が少し喋り過ぎる様だが、時代の変化と云うことのついでに、少しばかり昔の二号について話して見たい。古くは木曾義仲の巴御前、それから山吹などが、二号や三号であつたのだと思う。義経の静御前なども正妻ではない。常盤御前なども清盛の何号かに違いない。尤もその時分には戸籍法と云うようなものもなかつたし、貞操観念なども今日とは余ほど違つていたので当事者双方に旦那と二号と

云うような考え方はなかつた。徳川時代の將軍や大名などにも二号以下第何号かゞ相当に数多くあつたことは敢て文献をあげるまでもなかろうと思う。たゞその目的が單に性慾の対象、或は享樂本位だけでなく、男の子がなければお家が断絶する。從つて家來共は扶持にはなれると云うような生活問題があつたので二号、三号、四号、五号……と相當数のお妾を置かせたものである。何故そんなに沢山置いたかと云うと第一号でも二号、三号でも女が三十才になれば「お褥辞退」と云つて閨房を共にしないことになつていた。そこで自分の下に使つている腰元を推薦すると云うような点から、どし〳〵子どもの生れようと云う生熟期には、もう関係が絶たれたので自然子どもを産む数がおさえられたものだ。たとえ子供が出來ても女であつたりする関係もあり、勢い沢山な蓄妾をしたのである。旗本あたりのお妾には相当出入りがあつたものだが、それについて面白い話は「小便組」と云うのがある。相当貰うものを貰つて、これ以上居ても実入りがないと見たら同衾している際に寢小便をする。するといくら好きな女でも閉口して暇を出す。そう云う手段が行われて、うまく次から次へ移つていたのである。

**文蝶**＝話は違いますがね、かりに本妻を一号として妾を二号、三号と活字みたいに号数で呼ぶのはどう云う訳でしょう、子供やつたら何人あつても二号や三号や云えへんが（笑声）

**路郎**＝大体以前は一号、二号と云うようなことは云わなかつた。「おめかけ」とか「おてかけ」とか云う呼び方であつた。川柳でも二号と云う文字が現われたのは、恐らく昭和になつてからだと思う。

**没食子**＝そうですな。昭和六七年頃の「川雜」を見ても二号と云う言葉はありません。「てかけ」として出ていました。

**路郎**＝大正時代の句に

**三越へ來てお妾（めかけ）に**
**なるときめ**　（古蝶）

と云う句があるが、此の句など、その頃にはピンと來た句です。その頃の三越と云うものは贅沢の見本の様に考えられていたからね。「めかけ」と云うのは特に目を掛けるから、「てかけ」と云うのは手をかけるからと云うので出來た言葉だろう。

**文蝶**＝

**あの顔で　二號世の中**
**面白し**　（夢介）

と云う句があるが、妾は別嬪ばかりとは限らないらしい。

**没食子**＝僕の句にも

若いと云うだけがとり
えの二号なり

と云う句があります。（この時豆秋氏出席）

**豆秋**＝そらあんたの句だすな

**没食子**＝そうです。これはうちの家内が隣りの二号さんのことを「あんなん若い云うだけだつせ」と云うてるのを、そのまゝ句にしたのです。

**潮花**＝綺麗な奥さんの人に限つて二号をおいているようですな。

**文蝶**＝顔の悪い人は寢間がえゝと云うが……。

**豆秋**＝

**本妻の方が綺麗であり**
**ながら**　（ちか子）

と云う句もあります。

**路郎**＝今文蝶君の云つたのは性的関係からであるが、顔の美醜にかゝわらずこんな二号もある。

**この身上二號が殖やし**
**たやうなもの**　（静観堂）

この句のように、なか〳〵やり手な二号もいる。こうした人の第一号は大抵病身の人が多いようである。父の二号を娘などはどう見ているかと云うと

**二號置く父を娘はきた**
**ながり**　（青丹子）

と云う句がある。娘の純眞さ世間のことに汚れていないのがよく出ている句だと思う。

**潮花**＝そんな例を私も知つていますが、これは反対に妾さんの方の娘ですが、母の旦那さんから買つて貰つたものは何一つ身につけない。そして旦那さんが來ている時には母親がこしらえたものさえ汚ながつて喰べない。ことごとに常に母親を軽蔑する。そうしたことを見ていますと、今先生の云われた句など、確かに娘さんの心理ですね。

**亞鈍**＝先生がこの句を取り上げられた氣持は僕には解るね。それは二号とか、妾とか云うテーマを取つて川柳の対象にした場合に先生が一番に取上げる対象であろうと私は思います。と云うのは二号とか、妾とか云う存在は、あらゆる川柳の派を問わない処の川柳的現実に於ける作家の把握し得るもの、云い変れば妾とか云う存在それ自体が矛盾の上にある処の存在であり、諷刺、嘲笑、侮蔑と云つた様な川柳的要素を持つ対象であるからです。処が先生の提唱した所謂ロマン的川柳、

と云う面から考える作家の持つ川柳的対象は、單に客観的なリアルをそのまゝ川柳に拾い上げるのでなく、その客観的なリアルを一應主観で燒直した処のリアル、そう云う考え方からすればこの句は父が詠つた句であるか、娘が詠つた句であるか、それは批評する方は解らぬが、今の先生自身の考え方からすれば先生は恐らく父と云う立場から云われたのであろうと思う。それなれば先生自身の事かも知れない。その裏付けとして先生自身の句を引合に出すなれば

**二號を持つて子に意見**
**せず**

こう云つた路郎師自身の声を以て納得出來る所以であります。この句には妾とか二号とかに対する客観的な、或は川柳的な何等の要素が含まれていない。先生自身の眞情が出ていると思う。然しあながち先生自身の体験とは私は申しません。作家（藝術家）自身の精神的体験から來る声だと

思います。

**豆秋**＝同じ妾でも不幸な運命の犠牲になつているものもあるが、妾の川柳と云うと冷やかしたような句が多い。もつと深刻なものもあつてほしいと思いますね。

**亞鈍**＝今日の座談会のために「川柳雜誌」のバックナンバーから色々と二号の句を探して見たのですが二号の立場にある作家から二号と云う立場を忘れた女性の解放と云つた様な、二号さん自身の句と思える句が見当らぬ様に思うんですが……。

**潮花**＝こう云う句がありますが……。

**二號から見れば馬鹿げた共稼ぎ**　（久米雄）

**路郎**＝それは作者自信が二号さんではない。作者の客観句でそんな句ならいくらでもあるね。

**豆秋**＝二号さんが自分を卑下した様な句とか……。

**文蝶**＝二号さんを知らんからね。

**潮花**＝

**妾宅を臭ぎつけ本陣活氣づき**　（孤舟）

と云うのは本妻の方ですな。

**豆秋**＝二号さんが詠んだと云うのはありませんなあ。

**文蝶**＝

**二號とは云われたくなし藝に生き**　（竹荘）

これは二号さんの立場と違いますか。

**沒食子**＝これは二号寸前やな。まだ二号になつてないですよ。

**亞鈍**＝二号で旦那から喰わして貰わずに藝で生きている。と云う処……

**路郎**＝そうも取れるね。

**文蝶**＝動く句だな。

**路郎**＝

**本宅の話をスればムツトなり**　（翠芳）

これは二号の立場を詠んでいるようだが、無論二号自身が詠んだわけではない。

**潮花**＝

**本妻の惱み二號にも分り**　（五醉）

これです。

**沒食子**＝それは嘘だな。

**文蝶**＝それは三号さんが出來た場合だろう。

**亞鈍**＝一人の人を同じ様に愛するなら仲よくしたらよいと思うのだが、大抵一号と二号とは敵同士で仲が悪い。処が三号が出來たとなると、二号は一号の味方の様な心理になるんだね。

**文蝶**＝そりあ一号と二号とが仲ようするわけにはいかない。仮りに立場が変つて一人の女を同じ様に愛しているからと云うて、自分の女房にごちや〳〵云うて來る奴に、「やあ、一緒に飲もか」（笑声）と云うわけにはいかんからな。然し中には

**本妻が二號を我が娘の樣に連れ**　（菁花）

と云う様なのもありますね。

**路郎**＝それは一号がもう年もとり、若さ、美しさ、その他色んな点から、とても二号に太刀打ちが出來ぬと悟つている場合に、二号を自分の手下の様にして、一号としての立場を保つの方法だね。僕はそんな例を知つているがね。

**豆秋**＝大体男は金が出來ると妾を置くが、結婚した時の本妻は男が出世した時（例えば大臣になるとか）には大抵間に合わん。糟糠の妻と云うてね。社交性のある人などは少ない様だし……。

**亞鈍**＝いや大臣になつても糟糠の妻だつたらいゝんですよ

**沒食子**＝政治家は社交上置かんならんらしい。

**豆秋**＝あつちこつちに置いとかんと間に合わん。大阪へ行つたら大阪に、東京へ行つたら東京と云うようにね。宿屋の替りにもなるしね。

**路郎**＝僕は若い時分には男操主義と云うことを唱えて、女の貞操問題を云々するならば男も亦貞操を守らねばならない。従來男の貞操云うのは女に対する問題でなくて男同士の信義とも云うべきものを貞操と称しておつたが、そうでなく、女と同様の貞操問題を男に主張した。「雪」時代の話だ。然し齢熟して今日考えて見ると理論的には今も変らないが世の中はそんな單純なものではない。同じく妾を置くにしても色々と原因がある。主な例をあげると世継ぎが欲しいとか、取引の相手を款待するとかするのに糟糠の妻よりも二号の方がより適切であるとの考えから單に享樂の対象としているのや、中には本妻が極端に云えば性的不能者で、性の対象にならない場合だとか等々色んな場合があると思われる。更に自分の考えるには従來女は感情に生きるが男は事業に生きる。その事業を持続させる精力を作るための燃料として蓄妾すると云う場合もあると思う。これを私は「接木」と称している。と云うわけは本妻が自分に培うてくれる榮養が枯れてその補欠としての必要に應じてくれるからである。以上に迷べた様な点から蓄妾と云う手段が人によつて、場合によつて是認されてもいゝのではないかと思つている。これが僕の妾観である。

**亞鈍**＝先生の妾観を我々が鵜呑みにする事は危險極まるね

**路郎**＝だから場合により、人によりと云つたわけだ。中には氣の毒なのもある。妻が半永久的な病氣に侵された場合など、それを離縁すると云うような事は人情として出來ないし、そうかと云つて男は外で仕事もしなければならず、こゝに接木の必要が起る訳だ。尤も人によつてはその必要がないかも知れない。

**亞鈍**＝そう云つた先生の仰言る意味でなくとも、妾を持つている男がいるとするなれば何等かの意味に於ける男自身の勝手な考えによる妾観を多かれ少かれ持つているのと違いますか。そうでなければ法で定められた一夫一婦の制度を金掛けてまで破るわけがありません。

**豆秋**＝デリケートな問題ですな。

**路郎**＝人によると一号と二号

と云を同居させている人があるが、こんなのは性的享樂だけだろうね。病的かもしれない。一号二号同居と云う訳ではないがこんな句がある。

**一號も二號も猫もみな孕み**　（一浪）

豆秋＝暑いこつちやな。

亞鈍＝やり切れんと云う氣持ですな。妻が子を孕んでいると商人は緣起が悪いと云いますなあ。

豆秋＝二号が孕めばプラスマイナスか。

亞鈍＝商賣人は妻が妊娠をするとその年は商賣が駄目だと云つて一應緣起が悪いとしたものです。それが二号も猫も孕んでいるんですからね。

路郎＝女は妊娠をすると多少ヒス的になるからね。そうすれば男の心をいらだゝせるような事もあるだろうし引いては商賣にも影響して來ると云う関係でそんな事が云われるのだろうね。

亞鈍＝これはやり切れぬと云う感じを詠んだものと思いますね。

路郎＝句としては観察が鋭くユーモア味も多分にあるね。豆秋＝二号さんは汐時を考える必要がありますなあ。

**料理屋をさしてもらえぬうちに切れ**　（路郎）

**捨てられてからの二號はぜんざい屋**　（鳩花）

と云うような句があります。然しお妾さんには大抵しつかりしたお母さんがついている

これは本妻が死ぬように願をかけるのかな。

路郎＝それは男の子を産むように願をかけるのだ。

亞鈍＝今ふと思い出したんですが丹路君の句に

**妾の子又美しい生れつきえと妾の母**　（古句）

と云うのがありました。此の句は僕としては妾の何であるかを問わずして（何であるかを知つた上での事であるが）川柳としていゝ句だと思いますが皆さんどうでしょう。深いですよ此の句は

路郎＝僕の昔の句に

**私生兒は母の縞織と父の才**

と云うのがある。

亞鈍＝妾の子供は妾になるような宿命があるように思いますが…女としては女同士で嫉まれるだけの美しさを持つているのです。

浸食子＝僕の句でまずいのですが、

**妾の娘やつぱり母のあとをつぎ**

と云うのがある。

亞鈍＝そこまではつきり云つてしまわずに「また美しい」で何かそこに宿命的な哀しさを持つていゝ句だと思う。

豆秋＝妾、妾と云うけど一号さんやつたら女なら誰でもなれるが、二号さんにはなれぬ人が多い（笑声）僕が女やつたら僕のこの顔ではトンボ返りをしても二号さんにはなれんからな（笑声）

亞鈍＝けれども豆秋さん、僕は或二号さんに「貴女は倖ですか」と聞いたら「一号さんよりは倖です」と云つてました。「けれども三号さんが出來たら私は不倖です。ですからうちの主人に十号が出來れば最後の十号になりたい」と云つてました。

路郎＝それは物質より愛情が対象だな。

亞鈍＝私も次に云う様な句から連想して二号さんの氣持が解ります。

**片仮名で二號旦那を投**　（夢介）

**罵し**

**二號さんも手籠を持つて忙しい**　（水車）

それから最初に出た

**氣の毒に二號が馨を喰べていた●**　（谷水）

これ等は物質的なものを離れて旦那に対する愛情が出ていると云つてもいゝのじやないかと思います。

豆秋＝妾さんにも上、中、下色々ありますよ（笑声）

潮花＝うちの踊りの相弟子に副食費が一日三十円と云う二号さんがあります。これで三人が喰べているんです。だからトンガラシや間引菜位しか買えず胸が悪いんです。とても綺麗な人ですがね。

路郎＝物質を貰わずに二号さんになつているのもある。それにも色んな場合があるが、自分の子供の顧問の如く考えているのもある。

文蝶＝物質を貢ぐのもありますな。

春巣＝ではこれ位で……。

（春巣筆記）

# 不朽洞句帖

麻生路郎

銀行と緣もないのに忙がしく
貯金帖忘れたころに出し入れす

一万円今からツリが案じられ
老人の日の告白に妻が欲し

いつのほどにか二号に養われ
戎橋さえもいつしか秋となり

女のいない酒はさみしき
哀れ〳〵税に苦しむ役者とか

サルトルを伏せて女に溶け込みぬ
抵抗のきかぬ媚態にまばたいた

君知るや六十路をすぎてからの恋
円光の射すを男は見のがさず

妖艶を愛しつづけて息を引く

**ぜひ書いておいてもらえ**　（同）

尼崎市　水谷鮎美

約束が違うと涕をかんで去に
草に臥て今さら想ふことおほし

大阪市　市場沒食子

後輩の世話で日雇でも勤め
社長以下未だに畫はうどんなり
歳とつた證據に金を貯めたがり
親も子も理科か文科か未だ迷い

横浜市　福田山雨楼

水爆はこつちにもあるヂエスチュアー
奄美大島返してやると恩に着せ
アメリカも故智の焚書を辞さぬ肚

七面山兄上京お見舞を受く

うれしさは臨床訊問された形
ストマイもパスも知人もみな味方
ステツキで歩いた春を夢に見る

ホノルヽ市　内藤草一郎

入婿の遊び藝者に意見され
ドンファンの浮名へをんな打ち解けず
ぬかしたりお粗末なれど一人あり
帰化しても唄は二上り三下り
又父の欠けた食事へ母默し

大阪市・井上湧三

東京の第一夜

銀ぶらに柳さわがず人いきれ

青函連絡船にて

愛情をかきたつやうに本土の灯

函館入港

機雷見すけさ甲板に喜色あり
タラップへ江差追分迎へにき
赤帽ゐず走るフォームの長いこと

北海道に入る

こゝまでが日本領の土をふみ
とゞ松えぞ松樺が窓邊をとんですぎ
コンムニスト育つに遠い田もあつて

北大のポプラ並木

札幌の夏だポプラが脊伸びする

月寒の放牧

慾情もなく緬羊の草原にゐる
集團の示威でもなくて羊ゐる

室蘭水族館にて

塩鮭の泳ぎ見たさを嗤はれる

洞爺湖にて

えぞ富士は流れる雲に裾を見せ

登別温泉

そのかみのやうに畏れぬ湯浴絵図
湯煙りに裸像百態みな動き
あツたとへ絵にならうとも眼をつむり

地獄谷にて

地の底の感情みせて沸く如し
土の精の怒り狂へる姿かも
噴煙へ長き生命は近づかず

アイヌ部落(白老)を訪ねて

人慣れたアイヌの世辞をあはれめり
開道七十年パーマをかけたアイヌの娘

雑

入植の二世三世の娘(コ)と語り
媚態いふ北海道でごゆつくり
半生を雪に埋めむきみ哀れ

米子市　三鴨美笑

落着いて話そう君は嫉いている
母さんの意地張りだろうほつときな
妾宅で今日も謠の会をする

ホノルヽ市　白砂旋風

大病に死期近すくか慾がなし
永遠の平和とは今棺の中

鳥取市　大西八歩

應援は腰に團扇で詰めかける

中島鉄州氏重態

柳魂の強さ短冊引き寄せる

大阪市　正本水客

お別れの電話だけとは氣が強し
電話までひいて居るとは知らなんだ
西瓜の種落ちて情痴の部屋となり
大原女の夏に負けない脚でくる
窓下は氷切る音事務続く
今夜と云う急な話を女する

大阪市　丸尾潮花

ふるさとにて

めずらしいダリヤを賞める椽をあけ
いたわつて呉れるひとあり山涼し
水ももう秋になつたを金魚知り
おごられてゐるを忘れて居るビール
シミーズの儘でも逢へるひとになり
添ひとげて景もほめないひとになり
母の手で育つて母へたてをつき

逢へそうな予感を無駄なとこで待ち
大阪市　北川春巣

押賣りを上手に帰す妻となり
國の母來阪家ぢゆう國にする
晴耕雨読なすび一つへする感謝
大阪市立弘済院に盆踊りを見る

ほろ酔うて踊る阿呆になりたがり
奈良県　尾崎方正

ワンピース下駄履きで來る深い仲
イギリスのスタイル緯度を考えず
血圧を氣にする癖に呑み続け
大阪市　武部香林

朝顔にくよ〳〵すなとのぞかれた
うちの子が死んだで短冊書けと云う
買う爲で無し冷房を通りぬけ
ターミナル暑氣蹴飛ばして待つ若さ
水虫になつて社長も下駄を履き
左前よそにクイズで唄つて來
話掛けて見たし口紅つけていず
大阪市　水谷竹荘

誘惑の電話に負ける氣の弱さ
妻と子を映画にやつてビールのむ
大阪市　山口秋花

ダヾツ子を母は遊がになびかせる
出しやばりも金の話と知つて逃げ
吹田市　野本呑水

まかれたと知らず難波の灯に探し
氣晴らしがパチンコだけとは淋しいよ
奈良県　飯降白香

あきらめが花つくることを覚えたり
奈良県　西辻竹青

何の因果か税務署に奉職し
あんな事言う心臓を持ちながら
映画　戦艦大和を観て

轟沈へ隣りの席も手を合し
山口県　長野井蛙

割勘の声に寢たふりして居れず
税務署の良心呑ませただけは減し
大裂裟に赤帽汗を拭いて見せ
大阪市　森下愛論

人様の子へ目をむいてみる稚氣をもち
何もかも露骨に言えて寂しがり
岡山県　直原七面山

舞扇しもうてアブレの娘に戻り
結婚を忘れ切つてる女医博士
弱点を突かぬ男の方に惚れ
湯の宿でいろはにほへの浴衣を着
東京の女冷たい目を返し
東京の娘丹頂鶴に似て
東京の女の膝の固かりき
サツソウと大根脚も行く銀座
東京（三句）

東京は僕を小さく〳〵し
日を延べて好きな女と上京し
福田山雨楼氏を訪う

逢いたかつたお方に会えて蟬の声
煙草耳にはせてアロハの氣の軽さ
へべレケとへべレケ同士助け合い
落し紙の心配もして庶務課長
母さんの手紙箇條書で來る
大阪市　西森花村

お茶漬けも災害ニュースにすまぬよう
災害地だより

泥かきに精だしてると祖母の文
どこやらで御詠歌夜の氷店
兵庫県　家沢莽花

張り替えた障子の前で誓わされ
展望車からも一ぺん見たい富士
陸軍を誹る八月十五日
峠道先頭が曲るので曲り
東京都　藤本満年

見送りをしたがる癖も女なり
あら嫌だそれほど嫌な顔でなし
日航機の旅

機上から雲の種類を眺めたり
熊本県　西口如川

水魔襲ふ

風光明媚一瞬にして崩れ
農夫もう再起不能に立ち竦み
阿蘇山の落し子火山灰の山
親は子に子は親に悲鳴だけ残し
排土作業蟻の動きにさも似たり
岡山県　福島鉄兒

白粉へ女は歳を云わざりき
月末に頼んで戻る薬代
女また女がねたむ恋をする
大阪市　西いわを

愛称の電話東京からかゝり
全盛が一代きりの藤の棚
岡山県　横部牛歩

ライターのよさが今頃判る僕
蒔いてさえ生えない種のあるものを
叱られる言葉は牛も知つている

水害と火災の記事が並んで出
蚊を叩きや僕の血潮が迸り
痩我慢してパチンコにまだ行かず
ヤミ米に何俵廻る稲の出來
岡山市　服部十九平

踊の輪團扇を腰にして這入り
大臣がクラスメートの声で來る
妾宅に來ても株式市況聞き
麻雀を子から教わるほどに癒え
岡山県　大森娛句樂

制服を脱げば青田の風が寄り
風鈴の座敷トンボが素通りし
瓶の蝿餘り利口でないらしく
先代の遺品ひさごも金に替え
植込みをいつそ切ろうか蟬時雨
蚊の生かぬ村敗戰のお蔭にし
兵庫県　若林草右

手作りの胡瓜はつむじ曲りなり
レーンシューズできたとたんに梅雨があけ
大阪市　足立春雄

世渡りを教える女將酔うて居る
実験室にて
墓でさえ一つ一つの顔を持ち
熊本県　有働芳仙

宿の下駄ショートタイムに襲われる
盆踊りバレーの辯がちよいと出る
基地の子は先生よりも知りつくし
高知県　大西迷窓

ゆきずりに田植の乙女思ひやり
百日も経たぬに歩んよをさせたがり
下関市　石川侃流洞

前借りをする職人の腕が冴え
颱風が來るのにネオン派手な色
みつ豆屋から一緒に皈る共稼ぎ
大阪市　安岡珊枝郎

汗入れて之から三里下り坂
ロマンスも有つただろうに寺男
何んとなく叫んで見たし海に立ち
広島県　山田季賛

退院を待つてる様に草は伸び
凸凹を示す僕等のクラス会
離乳期をあせる女房に次が出來
板囲い又證券のビルが建ち
大阪市　山本葉光

隆鼻術すゝめて呉れるプロフィル
戰後派の他人の生命軽んじる
アパートのその日ぐらしも幸の内
大阪市　東喜久堂

スト会議ミレーの晩鐘壁にあり
老妻の團扇の風に安眠し
倉敷市　木村千容

山岳部日本の山であきたらず
名峯を征服したと笑わせる
一生を休暇の味も知らず老い
派出婦は甘やかされた口をきゝ
どんずまり半値になつた株を賣り
盲点を衝かれ再縁いなまれず
倉敷市　田垣方大

半日も待たしたあげくハイ手形
資材課の方へ娘をやるとする
庶務課長幇間だよとつぶやいた
石川県　那谷光郎

事務だけでないらし派手な女秘書
感謝狀箒をもつて三〇年
視察團何の視察か溫泉にひたり
文化とは警笛人を追い拂い
災害の視察へ白靴長ズボン
大阪市　木村水堂

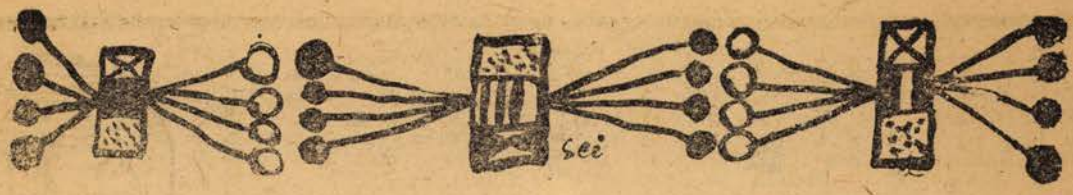
交渉は男勝りへ委せとき
世の中を甘くみているサングラス
元も子も無くしてからの善後策
ボーナスの追加ビールの泡になり
熊本市　花岡英子

麻生先生よりの小包を手にして
生きる身は溢るゝ愛の中にいて
確答をせぬ娘ほゝえみ丈おくり
酔つている女給故郷の訛だし
パパの留守マ、の献立すぐ変り
労務者のひるね涼しい風よ吹け
ざーますで中元一度はおしかえし
堺市　八木摩天郎

又と逢う日なき観光バスガール
堺夜市
かがり火の下で千両の市がたち
高槻市　福田丁路

恋愛の初歩は花束ばかり買い
手を合す程に嬉しく傘を借り
京都四條鮒鶴にて
老骨に鞭打ち祇園漫歩する
サインする舞妓をあほぐ賑かさ
望み通りに死ねと云はれて口惜しがり
倉敷市　水谷谷水

司会者のオイとは呼べぬ日の哀れ



その細き影を歎かずユーモリスト
せめてもの蠅をとらせる子沢山
愛情を定義づけるに借金し
のろけてはいるけど淋し未亡人
じらす氣か女亡夫の話する
ブロンドにしミーハー族の名に恥ぢず
倉敷市　椙原一善

置き酌ぎ御免とは女冷たいね
泳げない俺には海の熱さかな
少うしは蟻のマネでもしてごらん
岡山県　岡田夜潮

無邪氣だと母が言つてる間に孕み
課長よく切れて俺等の暑いこと
提灯を召せと差出す脂粉の香
涼み台畫は張物台に化け
行水の順序で涼み台へ來る
氣障な人かけたで涼み台へ來す
貸本の中から異性の髪が出た
岡山県　坂井三葉

病院の窓靈柩車又通り
腕相撲此れまでと云ふ顔になり
無邪氣さが一そう淋しい嫁き遲れ
岡山県　政田大介

酒飲と判つてしもた派手な怪我
折れて見りや骨も大事なものと知り
轉校へニックネームもついて行き
妻となりその愛称でもう呼ばず
大阪府　青柳扇子仙

ニコヨンとニコヨン昔のことにふれ
切手には女王現實主義の國
商標は顔と署名のダンロップ

さしあたり寡婦で行く氣のヘヤーピン
善人へ酒は憂いの玉箒
岡山県　岡村牛耕

お弁當忘れたのではないらしい
切れるから之だけ出せとヒモが來る
湯郷川柳大会へ

知事杯を掴み損ねた顔となり
行儀よいデモへ巡査がくたびれる
茨木市　下山清潮

蚊か蠅の様にアプレの人殺し
打水へ見て來た野球の夕刊か
夏休み妻には洗濯ふえる丈け
岡山県　本田惠二朗

翌朝はまるきり猫のようになり
白旗かざしライバルの巣を訪ね
大阪市　眞鍋一瓢

その祝に恐怖を語る災害地
雛僧の珠数を欲しがる檀家の子
仰山に云うて半間の棚をつり
日傭の詩へ燒酎は澄んで居る
手も切れる札とは操賣つた金
京都市　松川杜的

故郷の道昔ながらの鐘を聞き
傳說の町鶯嬢の名句調
四十もう退職金を計算し
大阪市　永田六龍子

浮氣等させぬ夕餉の妻の味
借りる丈け借つて蕩兒は祇園の灯
若き尼ふとコンパクト持つて見る
鳥取市　森本法泉子

親子三人浜村に遊ぶ

母となり妻ともなつて旅嬉し
幼稚園あちやばーなどゝ戻つて來
支拂日忘れて野球聞いてゐる
鳥取県　日置文郷

立志傳追放されたこともあり
人並に黑くなれない夏淋し
バラ園の雨に濡れてた君と僕
ラジオから飛んで出そうにミスワカサ
大阪市　佐野牛歩

社を退めた男がみんな出世して
墓參には多忙野球へ休暇取り
大阪市　後藤梅志

川風のつらさ涼しさ靴磨
出すまいとする虎の子を當てにされ
幹事から五円幹事へ引継がれ
校庭の野球にも馴れ草取婦
大阪府　小池しげお

川上の虹へ筏が下つてき
うめ干でいゝと病妻遠慮する
頃を見て幹事二級を運ばせる
奢られる弱さ奴が好きといゝ
炎天へ馬子も同んなじ水を飲み
岡山県　松村萬古

酔うた人大嫌いよが酒を酌ぎ
札びらが切れる頃には禿げあがり
倉敷市　藤井春日

飛行塔父ちやん照れ臭さそうに乘り
磊落さタイの結びに迄溢れ
一算頼むと四つ珠を持ち出され
いゝ柄ネ高いんでしようと瞳を燃やし
月一でチョイ〳〵用立てほくそ笑み

# 樂しめる古川柳

## ——岩波書店の二つの出版から——

藤本満年

私は非常にものぐさ野郎だから、読書以外には何の芸当もないくせに、古本屋へ出かけて名著珍本を探し出すことなんか滅多にやらない。そんなことは面倒なのである。毎日新聞の出版広告を見て、欲しい本があれば、本屋へ電話してもつて来させたり、家族に命じて近所の本屋で買わせておいて、気に向いたとき出して読むことにしている。だから、たいがいの場合、新本でなければ読まないのである。

しかし困つたことには、川柳に関する書物はなか〳〵新本では出て来ない。同じ短詩文学でも、短歌や俳句は続々と出版される。仕方なくそんなものを買い込んで、リズムや句材の勉強にすることもある。だがやはり、柳人には川柳そのものでなくては物足りないのである。殊に私たちに欠くるものは古川柳についての智識の乏しいことである。もちろん断片的には、しば〳〵古句に接することもあるにはあるが、筋の通つた古川柳に接することは、極めて困難であつた。それも本腰で古川柳を研究する決心さえあれば、その道の研究家もあるし、古書を探して買い漁る方法もないでもなかろうが、私にとつてはそれほど古川柳に熱を入れるわけでもないし、古川柳の研究家になる考えもなかつたので、現代川柳の騒音のなかで、細々と作句していたにすぎなかつた。

ところが、川柳というものは、ぬる〳〵とした「うなぎ」のようなもので、ちよつとや、そつとでは、つかまえどころがない。少しぐらいの破調はともかくとして、散文やら詩やら、訳のわからないものまで飛び出して、現代川柳の自由奔放さに、呆然自失することも度々という状態であつた。これがもし、川柳のふるさとである前句附ならば、こんなことにはならなかつたであろう。前句に対する附句であれば、もつと素直な表現にならざるを得なかつたであろうと、つまらぬ取越苦労をしたものである。そんなことから私はふと古川柳への郷愁を感ずることがある。この郷愁はアメリカの二世が、まだ見ぬ祖先の国を瞼に描くようなものではあるが……。

しかし、世の中はうまく出来ているものである。私のこのような郷愁を慰めてくれる絶好なチヤンスが訪れたのである。それは岩波文庫の「誹風柳多留」の出版であつた。その第一冊が出版されたのは昭和二十五年六月で、こと旧聞に属しているが、当時私は常に座右に置くというよりは、ポケットに忍ばせて電車、バスの通勤時間はもとより、勤務先の休憩時間にまで取り出して、大いに愛読玩味したものである。岩波の文庫版が、小型で携帯に便利なばかりでなく、定価も非常に廉価で、僅か六十円で買えることは、読書人にとつて、この上もない有難いことだつた。それよりも私の非常に嬉しかつたことは、日本一の出版社である岩波書店が、川柳に関する出版をしてくれたことであつた。岩波が川柳の出版をしてくれたことは、それだけ川柳の地位を社会的に、あるいは国文学的に、権威あらしめたと思うからである。

岩波文庫の誹風柳多留は全四冊から成り第一冊につづいて第二冊は昭和二十六年五月、第三冊はごく最近の昭和二十八年の三月に、それ〴〵出版され、第四冊は未刊であるが、おそらく、第一、二冊とも、すでに数版を重ねているだろうと想像される。私は川柳の書物が岩波から出版されたことについて、鬼の首でも取つたようないい方をしたが、岩波文庫は昭和五年すでに、西原柳雨氏の校訂で「誹風柳多留」上中下三冊（初編から二十四編まで）が出版されているのである。いまさら岩波の川柳出版に驚く必要はないのである。そして、その西原柳雨氏は文庫出版後間もなく逝くなつて、今回はそれを全く一新し、別個の改訂版として山沢英雄氏の校訂によつて出版されたもので、西原氏の出版以来二十年の歳月は、古川柳の研究は長足の進歩をしている。その進歩を十分に取り入れ正確な出典記入のある山沢氏の「誹風柳多留」はまさに決定版といつても敢て過言ではないと思われる。私は幸に各冊とも第一版を入手しているが、最後の第四冊が出版されるのを鶴首して待つ気持でいる。

川柳の初心者は古川柳を読むな、という言葉がある。俳句の場合には、芭蕉に還れとか、蕪村に還れとかいわれるのに、なぜ川柳は古川柳に還つてはいけないのか、最初私は大いに疑問に思つた。しかし、さすがに先輩は無意味な教訓をのこすものではないということが、だん〳〵判つて来た。上手下手は別として、私はいまいくら古川柳を読んでも、現代川柳の作風が、古川柳を真似ることは絶対にないが、ごく初心のうちに、古川柳に親しんで、もし古川柳の作風を真似ようものなら大変なことになる。たしかに現代川柳とは全く違つたアイロニーがある。川柳は人間臭い詩であるといわれるが、古川柳は人間臭い点では変りはないとしても、詩ではない。皮肉やユーモアはあつても詩性に乏しい。川柳を十七字小説というような角度から眺める場合は古川柳にも味わうべきものがないでもないが、詩性や芸術性を尊ぶ意味からでは、現代川柳の方が古川柳よりずつと進歩している。その点俳句には古いものにも詩性や芸術性の豊かなものが多い。だから芭蕉や蕪村に還れという意味もわかる。古川柳の場合は、第一点者の名は判るが、作者の名が判らない。どんな理由で古川柳は作者の名を明らかにしなかつたのか、私は深く知らないが、とにかく川柳の場合は芭蕉、蕪村に比すべき人がないのである。まさか十把一からげで、古川柳に還れというわけにもゆくまい。

文学はしつかりした古典の上に立て、という言葉もある。私もその言葉は深く信ずる。しかし、川柳の場合は、古川柳の上に立つ必要はない。古川柳はむしろ現代川

柳とは別個なものとして、比較対照、あるいは比較研究するということならば、決して無意味ではない。殊に一部の現代川柳のように無軌道な作品を見せられると、私と同じように古川柳への郷愁を感ずる人も多いであろうから、そんな場合の古川柳との会見は岩波文庫の「誹風柳多留」という極めて便利な道が開かれたことを幸福に思わねばならない。アメリカの二世が、祖先の国へ帰る完備した旅客機よりも、もつと快適で安価であろう。

岩波文庫の誹風柳多留のお蔭で、私は多くの古川柳に接する機会を得たが、その喜びの反面、私はしば〳〵壁にぶつかるような悩みに取りつかれるのである。それは古川柳を知ろうとする多くの柳人にとつての共通の悩みであるかも知れない。というのは、私程度の国文学の知識では、折角の古川柳の意味を理解出来ない場合が出てくるのである。多少の国文学の知識をもつているとしても、江戸時代の人情風俗を可成り広く知つていない限り理解出来ない句も出てくるのである。もちろん、どうにも理解出来かねる句はごく少数ではあつても、そんなものにぶつかると、もと〳〵古川柳の研究に志しているわけでもないから、つい面倒くさくなつて、とばし読みをするか、巻を閉じて読むのをやめるか、とかく次第に読破する熱意を失つてくるのである。もしこの一句一句に解説が附いていたらとか、何か難解な用語を直ちに解明する辞書のようなものがあつてくれたらと希うようになるのである。ほんとに横着な怠けもの心理に、われながら恥しくなるのである。

ところが、前にもいつたように世の中は有難いものである。最近岩波書店から「川柳雑俳用語考」なる出版があつた。これはすでに故人となつた京大教授穎原退蔵博士が、江戸時代語研究と川柳雑俳に関する史的研究の一鎖として、昭和十二年一月から同二十三年に物故される十余年にわたつて、「川柳雑語考」「雑俳用語考」「川柳用語考」その他の題名で、諸雑誌に発表されたものを一括編集したもので、柳人たちにとつてはまことに有難い書物である。この方は文庫と違つて堂々たる装幀で、定価も三百六十円、巻末には西鶴用語考なども附いていて、内容外観とも立派なものである。そして私は再び岩波書店が川柳に関する出版をしてくれたことが、またこの上もなく嬉しかつたのである。

穎原博士は芭蕉俳句新講全二巻の著書もあり、この道ではなかなかの大家である。こんどの「川柳雑俳用語考」も、川柳や雑俳に現われた江戸時代の用語の研究であることはもちろんだが、むつかしい学術書ではなく、平易な文章で、判りやすく書かれている。私たちはこの書によつて、江戸時代の言葉や当時の人情を知ることが出来るが、それよりもつと重大なことは、江戸時代の用語の辞書の役目を果してくれることである。そこで、岩波文庫の「誹風柳多留」で難解な用語、意味不明な個所に突き当れば、川柳雑俳用語考を持ち出して、たちまちその意味を氷解することも出来るというものである。私はもう古川柳を読みこなすのに、苦痛を感じなくなつた。文庫版の柳多留を途中で投げ出したりはしない。つれ〳〵に古川柳を読んでみるのも、楽しみの一つになつてきたのである。川柳雑俳用語考の内容の少しばかり拾つてみよう。

○人面相

一寸人相のよい顔と聞えそうな言葉だが、実は不人相な顔をいうのである。たゞしこの場合の人相は、真面目なきちんとした人相の義で、随つて鹿爪らしい、無愛想な表情を意味するようになつたのであろう。

日本へ来てはにんそうづらをやめ（柳多留十七）さらにくわしい解説があるが略す

○彌三郎

血眼で彌三郎めと追かける

（柳多留四十三）

権五郎目ざす敵は彌三郎

（同　五十八）

一チ目とつて殺される彌三郎

（同　百二十）

この彌三郎は、鎌倉権五郎景政の一眼を射て、却つて景政に射殺されたという鳥海彌三郎たることは明かである。第三句は碁の縁語仕立てで「一目の負け取返す権五郎」と同工。

○とぼしかけ

すでに手をつけた女の意か。即ち動詞とぼすに、着手してなお終らぬ意のかけが続いた語と思われる。

とぼしかけ油坊主の賞にくれ

（柳多留百十八）

油坊主の御褒美もとぼしかけ

（しげり柳）

平の忠盛が祇園の油坊主を生捕つた賞に、祇園女御を賜つたことであろう。

× × ×

といつたような調子で、なかなか面白い。怠けものの私が、これほど興味をもてるのだから、文庫の誹風柳多留と川柳雑俳用語考は皆さんにお奨めしても、決して間違いはないと確信する。古川柳も研究となると肩がこるが、読んで楽しむというのでは、大して毒にもならないことは請負つてよいだろう。


麻生路郎著　水武書房版

好評嘖々

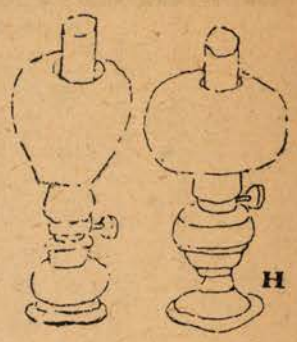
**川柳を研究したい人々に好適の書**

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書として唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢えて一読を慫む。

B六版（二一二頁）改正定價一三〇円　送料　十六円

取次御注文は　大阪市住吉区内方代四五丁目二五　振替口座大阪七五〇九〇

川柳雑誌社




# 川柳 役所と役人

八木摩天郎

三十年の役人生活から見て、川柳を通しての役所、役人と云う事について、聊か句を拾つて見る。誰れかの句に

**何事もハンコで濟すお役人**

がある。あながちハンコで濟すのは役人に限らないし、ハンコばかりついている訳でもないが、ハンコの御用は多い。

**官廳は新聞にまで判を捺し**　（富　至）

と云うような句も表れる。

**退職吏大きな判をもてあまし**　（素身郎）

判は比較的大きい。仕事の変る度に判を替える人もある。役所は書面審理であるから、

**もどされた書類ベタ〳〵判がいり**　（夢　裡）

で一般人もよく判の要る処ではある。役所は何んと云つても、予算で立つところ、予算に伴う決算と事務の処理も計理とその運営にあるので、よく役所で金が無いと云う事を聞く。大きい役所に金が無い、無いのではない予算に伴う金が無い。計上していない、キリツメた予算であるので、田舎などで永らく橋の落ちているのを見かける。

**最後まで予算がないで押すつもり**　（POE）

**名市長予算ふくらむ丈の腕**　（実　信）

借金政策か、健全財政か。

県庁にて

**税金で養う人がこうもおり**　（美能留）

で人の沢山なのに驚く。

**規定により書もキツチリ休みやはり**　（水　車）

遠方から来た人は、迷惑な話である。

**過去未来將来たかが公務員**　（没食子）

である。

**納税に来たに窓口そつけなし**　（凡九郎）

**役人のお世辞を聞いた完納日**　（久米雄）

窓口は親切をモットーにせねばならない。

**出直して来いと役人將棋さし**　（忠　美）

**出直せと役人にべも艶も無く**　（香　林）

**書類なき机多忙と突つ放し**　（摩天郎）

と云うのが、往々見られる。

**古川柳など引ぎ出して名署長**　（たゞみ）

川柳の醍醐味、川柳のよさ、を知つた役人でなければならない。路郎先生が警察官や労務者に川柳の講義されるのも精神は、こゝにあると思う。

**お役所の國語書類がきざに見え**　（没食子）

お役所も公文書は国語になつたが「相成可然哉」「伏て仰高裁候」のその時代の方が文書も早く書けて、意味もよく分つた。意思を強く発表せなければならない時、殊更に国語にして能率を低下せしむる場合もあろう。

川柳は殆んど国語で大衆文学だが、矢張文語で強く云う場合や、短歌にしても国語歌、文語歌と論議せられるも首(うなづ)ける。

**役人と云う肩書が上座へ来**　（四　案）

**知事代理府廳に訪へば庶務の隅**　（自由朗）

で相当信用もあり、社会的に待遇して呉れるが、官庁は代理派遣が多い。或程度止むを得ないかも知れないが、それなら始めから、代理を出さずに、それ相当な人を出して大衆を悲観さゝない方がよい。昔孔子が来ると思つたら、其弟子が来た話もある。

**知事代理やはり代理に迎へられ**　（悦　子）

である。

**酒を呑むことも仕事の一つとは**　（緑之助）

酒も毎日つづいたらいやになる。しかし

**飲ませとは云はぬが役人五時に来る**　（牛　歩）

**役人の通ひ馴れたるホールの灯**　（玲　花）

役人と酒！　役人と役得！これは心得ねばならない。大衆の眼が光り、税金に直結し注目の的になる。

**役人の子はにぎ〳〵をよく憂え**

と昔から役得からの汚職が附きもので、敗戦後の日本は税金攻勢の乱脈ぶりで正直に税金が払えないので首吊りまで出る騒ぎである。喰えぬものは麦でも喰うか。

**二十五でもう税務吏は家を建て**　（香　林）

不正があれば代議士でも大臣でも引つぱつてゆくことである。

**役得は大臣も立つ被告席**　（恭　子）

**肩書が輝り役得又輝り**　（ゆづる）

**役得の今日も包を提げており**　（枯　草）

**脱税を默認させる程酔はせ**　（光　郎）

で心得ねばならない。

**税務署の方なら二階すぐに貸し**　（佐保闌）

**役得もないのかいなとさげすまれ**　（あきら）

もあるし

**つぎ込んだ税吏がブイと轉任し**　（没食子）

のナンセンスも出来る。

**一枚の名刺汚職の足がつき**　（大　介）

である。役人も人間である。正しければ自分のポケット・マネーなれば飲み遊ぶのもよろしい。

アサヒビール
いつでも どこでも
三ッ矢サイダー

**花に酔へ汚職の金てない限り**
（光　郎）

**公僕の義憤は酔うて愚痴に似る**
（潮　人）

税務吏は大衆からいやがられる職業の一つ

**税務吏と知らずいそ〳〵おいでやす**
（小松園）

**税務署の次に基準局煙がられ**
（忠　美）

**税吏去ぬ後姿え塩を撒き**
（薫　）

**税務署はタオルを絞る様に取り**
（朴　山）

**税務署は民の白書を見てくれず**
（文　庫）

**仁術と云うを税務署見逃さず**
（春　巣）

である。税務署も無ければ国家は立たない。職務に忠実に

**税務員出さねば去らぬ坐りよう**
（七面山）

**税務署の実力トラツク持つて来る**
（たゞみ）

で一日の徴税責任額が大体決つている。徴税方法は幾らも手はある。

**うなづいて呉れる税吏の深い皺**
（わたる）

もある。

**完納の俺に督促状が来る**
（マサミ）

と云う手違いは、大勢だからやむを得ないがこれが喧嘩の種をまく場合もある。

**小包て濟むに役人持つてゆき**
（文　庫）

これは泣けない。

**公僕の名に殘業の灯が明い**
（摩天郎）

で夜についでの忙しさがある。別に僕は税務の仕事はしなかつたが……。

**能率の上らぬ男居殘りか**
（没食子）

はあながちに、役所には決らない。

役人には恩給と云う結構なものがある。商人の眼に恩給が羨しいかも知れないが十七年の恩給、十四年の退隠料は、正直に勤めたシンボルでもある。会社などの一時金はもつと大きいのがあるこの今もらう恩給へ閣議也としたる。誘惑に打勝ち、役得もせず、汚職事件に引掛らずに、完全に勤めあげた人に当然である。殊に殉職した人、不具になつた人の恩給、扶助料は頭が下る。

**恩給がどうのこうのと大手前**
これは拙吟である。

しかし恩給では今の世相では暮してゆけない。老後を養つてゆける時代が来なければならない。

**恩給は夕顔棚をつくつて居**
（琴　人）

**我々が今食う米へ閣議也**
（路　郎）

我々の今もらう恩給へ閣議也とした時節が来て欲しい。

**恩給と従七位とがついて来る**
（正　甫）

それは昔の事であつた。

**大臣も楽じやないけど止められず**
（芳　泉）

大臣の恩給年限の短いのは、どう云う訳か、老人だから、気を使う仕事だからか……。

**格下をして職につく五十過ぎ**
（鞍　馬）

**末席の机恩給ついている**
（摩天郎）

二度の勤めの人も多い。

**絹夜具の中で減俸案生れ**
（路　郎）

これは大分前の先生の句であるが、これが恩給に大いに、こたえている人もあるらしい。

**首きるにしてもうるさい首はよけ**
（没食子）

**恩給がついて因果な首となり**
（摩天郎）

**お役所の手落ち始末書丈けて濟み**
（淡　舟）

幾らもあるが、

**もの言へば首が飛ぶ世が近づけり**
（文　庫）

**当分は口縫うておけ縫うておけ**
（路　郎）

かも知れない。（終）

（筆者は不朽洞会員　元大阪府主事）

## 同舟近詠

松山市　前田伍健

闘争も春夏秋冬季題めき
清元の苦労も知らず女形
待ち疲れ聞くともなしに虫をきゝ
陶器趣味そも〳〵殷の甲骨字
一句でもすむに論説長いこと
水害へ視察の費用ほしい村
漫画家の宙でも描ける吉田さん
日本のよさを忘れたアチラでは

大阪市　麻生葭乃

手鏡へ御無沙汰若き日を忘れ
なめくじも猫も息するおそろしさ
未亡人その冗談へむきになり

疎開地追憶

柴賣りへ今日も時雨れる伊賀上野
ぢやこ値切る峠を越えて來た人の

税務吏が殘業すると、気味悪がられる。殘業も超過勤務手当を取る為めや、附合い殘りは感心しない。

**年度末予算が余つたあわてよう**
（哲　水）

**順番に出張をする年度末**
（哲　水）

## 大萬川柳ベストテン

梅里の店の大万の廿八年度は三月からはじまる。

（三月）青丹子、葉光、八ッ茶、水車、博也、梅里、大介、恵二朗、太路、晴蜂

（四月）青丹子、たゞみ、春巣、梅志、葉光、博也、梅里、八ッ茶、水車、文蝶

（五月）たゞみ、青丹子、賀蜂、梅志、春巣、梅里、葉光、博也、文蝶、方大

（六月）たゞみ、賀蜂、青丹子、博也、春巣、梅志、方大、一心、梅里、葉光

（七月）たゞみ、賀蜂、大介、春巣、青丹子、十九平、意坊、博也、一心、梅里

（八月）賀蜂、たゞみ、青丹子、博也、梅里、三司、大介、春巣、馬洗、十九平

以上は八月までの成績であるが、この成績をジッと眺めていると、古豪が蹴落されて圏外に去つたり、新進が先輩を尻目にグングンのして行く物凄さに興味は持たれる。この表にあらわれる結果が主として作家の熱が左右していることが判つた。

（不死鳥）

# 近作柳樽

路郎選

商談の不調コーヒを追加せず　貝塚市　宮本　甲馬
一と貨車の代金どこで腹に卷こ　同
大阪に宿屋代りの二号おき　同
調査するだけで原爆症癒えず　同
曼珠沙華患者の恋をあざ笑う　同
看護婦の対立クスリ忘れられ　同
附添婦離し仙煮ばかり食べ　同
豊作と思うた柿が落ち続き　岡山市　宗高八ッ茶
遊廓を値切り歩いた雨の中　同
朝帰り里から女房帰つてた　同
サンダルがためらう程も水を打ち　同
搖れ出して泳げないのを白状し　同
どう口説こうか思案しながらボート漕ぎ　同
妻の留守あつと言ふ間に米が減り　同
病弱が人夫の肌を憎う見る　大阪府　則武　朗郎
貧乏は嫌です赤い爪磨く　同
生きて行くのが面倒だと遺書にあり　同
女房のへそくり見たり五万円　同
税吏さすが病室までは來ず　同
病人の腹立ち肩で呼吸する　同
嫉妬の眼も浴びてボート押し出され　貝塚市　小島さざず
蟬鳴いて母の童話の一休み　同
絲便へ看護婦だつたママの處置　同
集團の力教えた日の寄進　同
仁保君退院
省りみて君の友情謝すばかり　同
残されし淋しさ言はず句に生きん　同
恐妻（三句）
二次会は部下にまかせる終電車　大阪市　若本多々志
御帰りは虎の尾を踏む押ボタン　同
門口で士魂商才影うすれ　同
乘り遅れまゝよ靴でも磨かそか　同
五十年働き蜂の悔もあり　同
脊中流しますとは嫁女もう言はず　滋賀県　土守トン坊
休暇にも帰らぬ息子となりにける　同
逢ひに行く度胸もアプレ型とかや　同
警官に酒呑ましてる小火の主　同
成功の望めぬ旅へ旅費をくれ　同
肩曳の上でみなし兒寢てしまい　大阪市　石川ひさみ
歌舞伎座を出たらホテルへ行くと言ひ　同
夜遊びに馴れて居ります二号です　同
男みな不貞に見える夏なりき　同
意氣地ない男で女またとられ　同
赤い月團扇をつかう手が忙し　吹田市　梶川　蘇堂
金魚鉢給仕井戸水もろて來い　同
二番草もんぺの尻の見えかくれ　同
ニュールックなどとズボラな断ち鋏　同
扇風機喪服の胸が拡げられ　同
どちらもが弱くて延長戰になり　愛媛県　高木　不朽
前金を貰ろているのに値が上り　同
智恵のない男皆勤賞をとり　同
まあざつとこんなものだと鯛を釣り　同

## 不勉強振りを顧みて

北川春巣

「此の頃の若い者は勉強をしない」とわたしたちの若い時によく言われた。自分では勉強をしている積りだつたが、先輩の眼にはそうは写らなかつたのであろう。所が今度はわたしたちが若い者の勉強ぶりを見て同じ事を言わねばならぬ年頃になつて来た。若い人達にして見れば一生懸命勉強している積りかも知れないのだが、こちらの眼にそうとは写らない。

現在医者になるためにインターンと言う制度があることはどなたも御存知の事と思う。医師になるには国家試験に合格せねばならぬのだが、四年間の医科大学を出て国家試験を受けるまでに一年間インターン生と言うものになつて、臨床方面の勉強をしなければならぬ。誠に結構な制度だとも言えるが、此のインターン生なるものが、わたしたちの眼から見ると一向に勉強しない。大学は出て医者のような恰好をしているがまだ「医師」ではなく、一年後には国家試験が待つているので、臨床も思い切つてやれず、本ばかりも読んで居られない、と言う気持はよく分るのであるが……。

わたくし共が学生の頃には、夏

年がいもなくぶらんこの繩を切り　同
扇風機の風もとゞかぬわが机　倉敷市　野田素身郎
涼み台膳の毛などをくらべて居　同
盆踊知つてる踊はすんだあと　同
麗人が乘つて読んでた本をふせ　同
水害へ氣兼しながらもうけて居　同
賑やかな初七日佛だけが損　出雲市　まさる改め佐藤泰之
機関士の因果は又も人を礫き　同
警備隊艦旗はためく日も近し　同
李さんはワンマンよりは役が上　同
議席さへ占めりや大臣夢でなし　同
先生はどなた藝者ともいえず　大阪市　若本　眞彦
虫干にあゝ紋付があつたのか　同

母（二句）

腹だけはかけて寢なされ母が居り　同
三等がよいとおふくろ困らせる　同
いゝ時に辞めたで次の椅子があり　愛媛県　米沢　曉明
灰皿を投げよと投票したでなし　同
頂上へ写眞を撮りに來たような　同
辞め時は友が進めた頃だつた　同
スタイルは良いなと海で誉められる　大阪市　木口　賀峰
氣の弱さ温泉街を素通りし　同
二次会えついて來る娘をもてあまし　同
サンシーのビラ女湯でみてもどり　同
膝枕呑まして呉れた酒に咽せ　姫路市　難波　愁夢
牢名主基督に似た髯を撫で　同
末席は男同志で酌いで呑み　同
三日ほど続く社長の登山帽　同
遺家族も故人も知らぬ樒立ち　大阪市　藤村　梨花
世の中を揺するマルクス歌謡曲　同
客寄せのテレビへガラス戸われただけ　同
追はれる身追ふ身駅弁かみしめる　同
二度三度負けて力の相違知り　今治市　長野　文庫
保安隊などもそろ〳〵出來かゝり　同
デー祭週間やれやれ忙がしい　同
歩み寄りする氣最初は無茶を言い　同
ひやかしの客一應はもてなされ　広島県　御戸　凡平
潮の香を顔に看護婦脈をとり　同
好感の婦長縁には程遠く　同
回診は唯フンフンの味氣なさ　同
金だけの娼婦の恋に靴をはき　和歌山県松本　竹外
看護婦の声先生は留守らしい　同
病人の顔せずパーマかけに行き　同
孤独な日金魚も静かに泳いでる　同
胸算用月賦も一つふやそうか　大阪市　小倉へとち
海水はロハおべべぬぐのに金かかり　同
硯の海我が健筆をまつ如く　同
屈托もなく吟行にほとゝぎす　同
一と言の親切窓口親しませ　愛知県　坪井　無松
扇がれて読む盆経が二三分　同
見栄もなく寄附を断る妻になり　同
きつうおすえと舞妓のつめり様　貝塚市　芝原　洋史
キッスした顔とは違ふ顔で去に　同
ばあさんは虹が出たにも手を合わし　同
錄音へ棘のあるとこカットされ　玉野市　渡辺あきら
官廳は寸志にまでも判をとり　同
子煩悩さつぱり泳げぬ子に育て　同
切れるならチャンス旦那はもう落目　岡山県　小原　宇柳

---

休みなど大学の医局へ行つて「学生」として手伝わしてもらつて、胃癌患者や肺結核患者などに聴診器を当てさせてもらつたり、胃液の検査や喀痰の検査を引受けてさせてもらつて喜んでいた。その頃のわたくしたちの心構えが今のインターン生にはないように思える。その頃のわたしたちは、又それでいて先輩に叱られていた。先輩たちの話によるとその学生時代には、一夏中にありとあらゆる病気を見ておきたいと思つて、胃癌患者は一度見たら、もう二人目は見ず、肺結核も肋膜も黄疸も腎臓炎も患者は一例きり見るだけであとはその先輩の先輩に話をして、見るのを断つたそうだ。広く浅くと言う意味であろう。そう言う言い方なら、わたしは狭く深くやつて来たと言える。胃液の検査でも一回よりは二回、二回よりは三回と上手になるので次第に検査を頼まれることも多くなつたからで、勢いそうなれば他へ目を向けるひまもなくなつた。

今のインターン生には広く浅くの型も、深く狭くの型もないように思える。

川柳の方面でもこう言う傾向がある様に思う。昔は一題百吟、徹夜句会などあつたそうだが、自分には百吟も作句したおぼえはないし、又徹夜で句を作つた事もない。昭和二十三年秋不朽洞山房で徹夜句会が催された折にもわたし

婦人科で出合い旧性呼び交し　同
愚痴一つ言はぬ賢さ頼られる　同　福島　丁坊
馬車馬でない證拠には浮氣をし　貝塚市
オンリーが肩で風きる基地の街　同
社長ともなれば謠曲のひとくさり　同
妻の手間けなして出來た瓜を喰べ　愛媛県　藤田　博人
ゆづられた背廣昔の價値で着る　同
先輩の暑中見舞が先に來る　同
子のできるまでを二階でともかせず　岡山県　梶原　節子
二階がりする〳〵婿になりました　同
婚約期夢も手紙へ書いてくる　同
新しいビルへ銀行二三軒　滋賀県　久保　和友
ニュールック太つた足をどうする氣　同
日の丸をあげて先生御在宅　同
從えば波も愉しく娘と泳ぐ　出雲市　森山　壯

水　魔

水害は蚊に喰はれても無感覚　同
たたきつぶして見たい闇屋と云ふ蚊共　同
視察だけ派手でちつとも補助が來ず　岡山県　春名　秋芳
中毒の責任母がみんな負ひ　同
むかついて見たが税吏に勝てぬ身の　同
宣傳カー不作の道を派手に過ぎ　岡山県　岡本　薫翠
流行歌手帖に書いて妻若し　同
待人が來ずサンダルで石を蹴り　同
浮氣された嫁は親にもケチをつけ　大阪府　森本黒天子
しやべる氣にならぬ暑さが部屋を出ず　同
おつちやんの前で平氣な身だしなみ　同
竹割つた様な夫で出世せず　岡山市　齋藤　一心

お目出度い親で苦労がつきまとい　同
忘れさす様に周囲が氣をつかい　同
鬩刈人夫名残を惜しむ手を振つて　岡山県　大塚美能留
嫁がした算盤だけが合うており　同
浴衣などいらぬ一軒屋の涼み　同
顔も氣もこんなにちがう長女次女　米子市　勝田　正郎
子供には子供の好み茶碗選る　同
マネキンに化粧の顔を借りられる　同
元婦警ほり込んだ奴と出会うたり　姫路市　小畑自由朗
死ぬひまが無うて生きてた五十年　同

祝おばはん駄菓子屋開店

千客万來五円十円二十円　同
酔ふ程に鵜飼どうともなれと言ふ　芦屋市　里田　一十
夜目遠目さらに鵜舟は矢の如く　同
宿引の方がすつきりした身なり　同
親程にないのが田地買ひ戻し　岡山県　岡田　青果
陣笠が扇子へ悪筆揮わされ　同
交際は受け印をせぬ程度にし　同
バスに似た大きな尻の車掌さん　石川県　福田　卓風
あきらめたやうだでそつとしておきな　同
病身でにきびも出ない身を敷じ　同
片意地も留守は淋しい妻であり　和歌山県　美野百合子
朝鮮の君へ反対蹴つて嫁く　同
團扇いま派手な浴衣がほしいなり　同
山百合が人に知られず咲いていた　貝塚市　高崎　雄声
残業のような顔して帰つて來　同
商魂が一人の客も見逃さず　同
父と母意見が違ふ子の登山　和歌山県　岸本　木魚

---

は出席しなかつた。一題で無制限に作句せよと言われても二、三十句作ればもう出来なくなつてしまう。年寄りから不勉強だと言われても仕方がないと思つている。一題百句組も、徹夜作句組もなくなつたら、どうなるのであろうか。

## パチンコ

須崎豆秋

パチンコ
パチンコしてるおじさん
まめをたべてる
かわをくわえて
みをほつている

この詩は小学二年生の作品であるが、大人たちがパチンコに夢中になつている表情をうまくキヤツチしている。

煙草専売公社の調査によるとこの大人たちがパチンコ屋へ落す金が年約一千億円で、国の予算の一割以上に相当している。全国でパチンコ屋は約三万軒あつて台数が七十万台をはるかに越していると いわれているから何のことはない約百人に一台ということになる、これを大阪府の統計で見るとパチンコ屋が千五百軒余、台数約七万台だそうだから二十人に一台位な割合だがこれから府税収入が月五百万円あるらしいから大したもんだ。

**パチンコ屋ばかりの街に**
**なりやせんか**　豆秋

階段の裏ですつてる謄写版　同
陰氣なる事務の帰阪早くなり　同
口ほどに日稼ぎの腰働かず　和歌山県久保田青竹
腑甲斐ない良人と云わず手内職　同
病む故に行商もする妻にさせ　同
決壊の我田え父は顔そむけ　福岡市　岩田十三楼
電産の署名一睨して通り　同
水藝を見て來た母の夏祭　同
だまされてよし眞実のみちならば　奈良県　野中　稔一
無造作に飛び降り遺書もなかりけり　同
床上げへ母のはたきの手が軽し　同
須磨の海水害などは知らぬ風　東京都　石居　高志

祇園にて二句

雨の街舞妓に道をよけてやり　同
京の雨明治の音を聞く心地　同
モチモチが背伸びをしてる電話口　大阪市　永田都詩子
栄養的経済的にと妻忙し　同

哲水さんを偲んで

おどけては眼鏡で笑う君なりし　同
駅長の大きな時計見た旅愁　岡山市　津田麦太楼
賣れ残るものに人間とは哀れ　同
保険屋が來て桐を誉め牛を誉め　同
友情で貸した小金は忘れられ　和歌山県貝岐　瀑子
姑の手は口ほども働かず　同
脛かじる身であり乍らピースをふかし　同
蓑笠で娘に見えぬ田草取り　岡山県　國富　直人
貸傘が出來ても母は迎えに來　同
新夫婦母を挟んで芝居を見　同
大阪の夢は冷たくなり果てぬ　兵庫県　森本　花子
ざくろの実村は祭りの子がさわぎ　同
自尊心きずつけられてから別れ　大阪市　伊藤　定美
暑中見舞つめたくなつた人と知り　同
轉覆のボートが恋を育て上げ　倉敷市　岡野風の子
恋人に見せたい派手な泳ぎよう　同
間借人声を押えて妻叱り　津山市　三木　香平
煙突の煙ボーナス出たらしい　同
モシャクシャの百円札に礼を言ひ　赤穂市　川西　去水
恩給も退職金も無い命　同

長男二階より転落

責任は誰かとにかく妻叱り　米子市　小西　雄々
米穫れぬうちに机で値がきまり　同
置き忘れ叱つた妻へ照れくさし　出雲市　久家代仕男
世間態どうのと女よせつけず　同
捨てた子に母の権利があるものか　出雲市　日野加壽緒
あの人がなどと言ふけど詩人です　同
初恋の人は一兒の母なりし　兵庫県　小池紫陽坊
優勝旗選手を泣かすものなりし　同
照れ臭いゼスチュアー指の骨鳴らす　三原市　小田　桂角
ゲラ〳〵と笑う女患に婚期くる　同
女房を騙すスリルも覚えてる　貝塚市　小田　柳叟
唐麥木が灯をつけている夏の月　同
詩稿だけ持つて逃げたと水便り　大阪市　不二田一三夫
手を膝に元女教員子を叱る　同
名を替えてみても出世は請合へず　高知市　岡本　元馬
外米の石撰る妻も疲れたり　同
夕立に拍子抜けした水喧嘩　岡山県　光好三四詩

---

何がパチンコをこうも全国津々浦々に夏草のようにはびこばせたのか。

「庶民の政府失政に対するレジスタンスだ」とか「はげしい人生のスリルへ切込めぬ者達がせめてもの夢を求むる休息所」だとかいろいろ言われているが、そう堅くるしい批判はさておき、パチンコは一切の雑念を忘れて無心に一人楽しめるところに妙味があつて、老若男女がともに肩をならべて楽しみ、しかもその勝敗でお互の間になんの喧嘩やもめごとも起らない点などがおもしろい。

パチンコに限つたことはないが、余り凝らないようにさえすれば、われ〳〵庶民が一日の疲れをたとえ二、三十分間でもチンジャラジャラによつて解消し気分を転換して明日の活動に備えられるとしたら、小銭で遊べるレクリエーションとして大衆的と言える。

**破防法通過パチンコしてる間に**　豆秋

しかし今やパチンコは庶民娯楽指数で三十三パーセントを占め映画演劇の四十九パーセントに肉迫しているのであるから、今こゝでパチンコがさつぱり止まつたとしたら、この浮塵子の如きパチンコファンの大群は、いつたい何所へ行つたらいいのか、ためしに全国のパチンコ屋が一日だけ一斉休業して見たらどんな現象が生じるか

娘もう母を稽古に默否權　同
秋茄子を取る妻に今朝の幸があり　岡山県　穂北ペン郎
犬の目が僕の仮病を淋しう見　同　丹波　太路
結婚の晴着は嘘の初めかや　大阪市　同
冷たいとは見えぬ氷屋にある見本　同　野口卯之助
成長をする子へ妻を強氣にし　宮崎市　同
基地の子の産湯たらいの混血兒　同　中谷ハナ子
ショートヘヤ衿あしの美もここへやち　大阪市　同
日焼もへつちやら二の腕ニュット出し　同　岩川　寛虚
親切が身にしむ齢になり寂し　愛知県　同
看護婦がかわりベットに名を書かれ　大和高田市　岩垣日本村
こんなにと言うて白髪が二三本　同
大臣も鼻には自信無い氣配　松尾　天信
紅一点どうでも隅に居りたがり　神戸市　同
池で死んだ話末つ子にも聞かせ　同　安井　蜂呂
みだれ籠はあなたが買へと若き妻　大阪市　同
午后行くの電話ビールが目當らし　西川　惠風
事件などなかつたように灯がともり　大阪市　同
日曜日大きな子から遊びに出　安井比佐志
づぼら者大阪時間にもおくれ　大阪市　同
エチケット集そつとしのばせ羽田發ち　吾郷　玲人
踊り子に東京染の地味な柄　大阪市　同
夏草が四五日前の路を閉じ　同　伏見　次朗
愛情を試めされているハイキング　貝塚市　同
帰省する故郷もなくて二階借　大和高田市　戸田麻由美
長女琴次女は野球と言う育ち　同
ストローを二本残して行つた恋　同　原　章坊
簡單に別れなさいと人生欄　松江市

六人部屋心得え母の見舞品　同　佐藤　房子
曲線美なか〳〵海へ入らない　大阪市
涼み台ギター近所を眠らせず　大和高田市　戸田　嘉一
子を叱りとばせば妻はつつかかり　同
みくじたて蛇の祠へだらり帶　同　戸田　悅子
わたしだけ知る思い出を抱いて病み　大和高田市
灯の消えた如し母さんいない膳　同　吉原　紅月
月見草淡路の見える丘に咲き　兵庫県　同
百姓へ嫁くのが嫌なイヤリング　同　村上　旭童
絶景へ泣きに來ているのも交り　愛媛県　同
地方賣價とあるがいささか氣にくわず　同　有之　幹二
後姿に注ぐ視線の厚かまし　岡山県　同
雜談ばかりで司会者困りぬき　同　堀井　一峰
善人の哀れ商法身につかず　貝塚市　同
人生五十女にもてたこともなし　同　安永芙美子
母さんの愛人だつた人に逢ひ　貝塚市　同
父兄会注意をしたい親は來ず　同　坂本竹ん馬
アルバムに父の写眞の古過ぎる　出雲市　同
信仰の事だけ夫婦氣が合わず　同　渡辺伊津志
酔つた振りして勘定にケチをつけ　尾道市　同
受刑者の心理を偲ぶ手術前　同　松吉　秀月
ハイヒール手荷物一つ持て餘し　大阪府　同
父ちやんへ代る代るに注ぐビール　同　魚住　滿潮
強盗のまだその上に飯を喰ひ　大阪市　同
代議士に出て刺青をちと困り　同　辻　圭水
投身もしばし見つめた海の荒れ　貝塚市　同
競輪に傘までさげた周到さ　同
乘り換へて此處から故郷の顔なじみ　京都市　松下京一楼

---

を――バチンコをこゝまで育てゝきた政治家よ、頭を冷やしていつぺん考えて見て下さい。

## うなぎ

藤本茶々

「チワ……」

「あのね私は今度ね、渋谷にサ新しくサ開店したうなぎやでございい、うちの大将がサ、店開きの宣伝にサ、もとを切つてサ、皆様に試食して貰えつてんでサ、今日はこうして廻つてるんですがね、奥様どうです、うなぎは本場の上物でサ、油ののり工合、たれの味も上上でサ、お安くしときます一串八十円如何です、五串買つて下されば七十円にしときます安いもんです、たれもうんとサービスしますよ……」

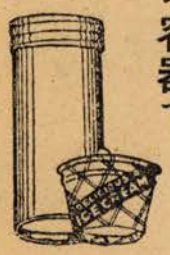
と息もつがずに早口にまくしたてゝ来た。二尺に一尺五寸位の箱の中を見れば串にさした蒲焼がぎつしり、とてもいゝ匂がしている。一串八十円なら高くはないな二三本買うかな、としゅん〳〵していると顔色を見てか、

「どうですついこの先の大きな洋館のお家でも十串随分安いつてんで買つてくれました。奥様五串買つて下さい、三百五十円ですよ、今どきこんな買物はありませんよ」

巧な言葉につられついに、では三

六三制男も針をもたせられ　同
文化式お燈明までスキッチで　大阪市　正口　辰始
腹立の電話ガチャンと投げて切り　同
盆踊り母の仮装がよく目立ち　和歌山県田中無津美
春泥をきすかいつゝも試歩樂し　同
盆踊り相手ほしそな眼にも会い　大阪市　目方　牧湖
事務長が留守居をしてる草野球　大阪市　池戸　桃村
パ、だつて動物園に來て樂し　熊本市　高野　宵草
恋人のくれた花なら枯れる迄　大阪府　仁科　高峰
屋台店にもプライドのある銀座　奈良市　絹下　南天
ニヒリスト案外派手な過去を持ち　大阪府　山本青道心
世渡りを芝居上手にして渡り　岡山県　亀井　星浦
月末は財布たゝみへほり出され　大阪府　廣沢　桂月
退院し去年の鶏に起される　鳥取県　新竹しげる
失業はしても負けぬ氣々前見せ　大阪府　難波　櫻天
保安隊感謝をされてこそばゆし　貝塚市　河楊　梵鐘
おつちやんのばかと手ひどくたたかれる　岡山県　沖　一糸
誕生日手製のすしも母の味　大阪府　坂本　秀麗
病める身はヘチマののびを目測し　大阪市　河村　浮雲
退院の療友送る試歩うれし　倉敷市　赤木　正平
金の脈つきれば元の未亡人　山口県　田中　秋穂
ナイターでふと空襲を案じて居　京都府　堀　不漁
置時計今臨終の人もあり　大阪市　池田　正斗
打ち水の庭眺めてる幸福さ　大阪市　兒島與呂志
外交員元は官吏で角が立ち　和歌山県松元　三朗
駅前をパチンコ風景にしてしまい　岡山県　國正兼比羅
倦怠期知らずに貧へ共稼ぎ　大阪市　木村　十悟
いな光り長いお経が止ゝ勝ち　大阪府　南　野
爪をかむくせが見合の時にも出　大阪市　長田　塗杖
死ぬ程の恋に絶景見つめられ　大阪府　横倉漫多朗
白張りの一つ淋しい母となり　岡山県佐々部満佐志
お見舞の花もしほれる八度五分　大阪府　生島　蕪青
母さんもちよつぴり基地のことに触れ　和歌山県谷口喜久治
美女三人視線の中をボート出る　岡山県　南部ひでを
パチンコ屋音も盛り場らしい音　京都市　鈴木　誠史
蚊帳にきく隣りのラヂオ面白く　岡山県　多田野保子
書見器へ何の氣まぐれ蜂とまり　和歌山県岩崎　君代
行水の盥の方へ蟹が這い　下関市　加藤　司楼
呑助の妻には憎い深夜バス　大阪府　大橋　溪泉
刺青に湯壺の客は皆上り　岡山県　池田　古心
久々の帰郷に母の送り風　大阪府　竹林　小雀
阪妻が死んで王将生きて居る　大阪市　岡島凡柳士
お見舞の母えおいしく喰べて見せ　大阪府　鈴木　風鈴
梅雨に愚痴暑さにぐちて冬に愚痴　大阪市　清水　望峰
小さな國だに地震神鳴風水害　尼崎市　米田　玄米


アイスクリームは
堅牢で衛生的な
この容器で



酒販用紙コップ食堂用紙製品一切

特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 (66) 2802・2803


本だけいたゞきましようと言つてしまつた。

「奥様五串買つて下さいよ、七十円ですと大サービスですよ」と食い下がる。

とう〳〵五串買わされてしまつた。今晩は久し振りにまむしにでもして皆を吃驚させてやろう、それにしても買物だつたなと鼻唄でも出したいような気持だつた。

「オヤッこのうなぎは何だかおかしいぞ、尻尾の方に長い細い骨があるぞ、それにこのまむしあんまり匂がないな、東京ではうなぎまで上品に出来てるのかな」と主人のつぶやき、私も内心少し変だなと思つていた矢先なので半分ベソをかいていた。

「こりやハモだよ〳〵うまく騙したもんだな」私は口惜しくなつて泣き出してしまつた。井に半分以上も残つたまむし、いえハモどんを砂をかむような思いでようやく食べ終つたが

「お前の気のいゝのにあきれるよ、あんな行商の物をうか〳〵買う奴があるか」と叱られた。

「私も少し安すぎるとは思つたんだけど」

「安すぎると不審に思つたら買わねばいゝではないか」ともう一度叱られた。

私達上京して三日目の出来事である。

# 平清盛（一）

冨士野鞍馬

平清盛は、元永元年（一一一八）戊戌、忠盛の長子として生れたのであるが、母は、白河院の寵愛だつた祇園女御で、懐姙のまゝ、忠盛へ下されたのである。そして生れた子が女だつたら朕の子にするが、もし男だつたら忠盛の子にせよというのであつた。ところが男の子であつたので、忠盛の子として育てた。その子が夜泣きするときこしめして、白河院は

夜泣すとたゞもりたてよ
末の世に清く盛ふること
もこそあれ

と詠まれたので「清盛」と名乗らせたというのである。

幼少の頃は平太といつたが、白河院崩御の年、大治四年（一一二九）十二才で元服して、従五位下佐兵衛佐となつた。保延元年（一一三五）十八才で従四位下に進み、華族に列した。この時、鳥羽帝は「清盛が華族は人に劣らじ」と仰せられたという。翌二年には、中務大輔、三年には肥後守となり、久安二年（一一四六）には、二十九才で安芸守になつた。

安芸守だつた時、伊勢の安濃の津から船で、熊野へ参詣する途、大きな鱸（スズキ）が、その船へ躍り入つた。それを先達は「昔周の武王の船にこそ白魚は躍入つたるなれ、いかさまにもこれは権現の御利生と覚え候。参るべし」といつて、平家の瑞兆として、船中で料理して、皆が食つた。それから平家が栄えたというのである。

鱸から潮の間が二十年
川鱸躍る栄花も二十年
（タル百）
（〃一二〇）

と古句にあり、「潮」（ウシオ）は壇の浦を意味し、平家の栄華は二十年間であつた。

平清の奢りの末もうしほ
なり
（タル九七）

と深川八幡前の料亭「平清」を清盛にかけた句もある。

安芸守時代は十年程で、その間に、厳島神社を造営し、信仰厚く、平家の氏神と崇めたのであつた。それを古川柳は

安芸守時分は至極信者也
（拾五）

いつくしま今造営もあきの守
（タル十九）

いつくしまおごりの内の疵に玉
（〃一六五）

されど清盛宮島の大旦那
（〃一二八）

伊勢武者にしては清盛大気也
（〃八二）

等と詠み、忠盛は伊勢から出たので、吝ン坊の伊勢屋になぞらえている。

仁平三年（一一五三）清盛三十六才の時、父忠盛は五十八才で亡くなり、その財閥も継承し、保元の乱の、保元元年（一一五六）には、三十九才で播磨守になつた。翌年には太宰大弐となり、平治の乱を経て、永暦元年（一一六〇）には、正三位、権中納言に進んだ。

その翌應保元年（一一六一）に、かの有名な兵庫築港を企て、経の島を築いた。これは兵庫を開港して、父の業をひろげ、宋國との貿易や、文化の輸入を計画し、実行したのであつた。清盛は、政治、経済に手腕があつたといえる。この経の島築立の工事の時、扇で日没をあおぎ戻して、工程をはかどらせたという傳説があるので、次のような句が詠まれている。

日輪にまでつつかゝる無法もの
（タル二）

万国の時計清盛狂わせる
（〃一五六）

一日に二度日の暮れる平家の世
（〃六八）

清盛も其日に夜食二度喰はれ
（〃三二七七）

平家の世一度夜食の腹がへり
（〃六八）

月を招くと清盛は腫れ病い
（〃一五五）

——日を招いたから熱病になつた——

築島の後は奢りに非を招き
（〃一〇八）

——日と非をかけて——

清盛の扇のほしき花の山
（〃七七）

——便利不可思議な扇

この工事は二月上旬にはじめられ、中々難工事で、人柱を建議した者もあつたが、清盛はそれを採用せず、石に一切経を書いて沈めて、遂に築きあげたので、その島を「経の島」という。

# 人間横丁（Ⅵ）

東野大八

## 商埠地の少女

このほど東京の友人から、Kが肺結核で死亡した旨の便りを貰つた。Kというのは、私の奉天時代、同じ下宿で巣を張つた親友で、齢はたしか私より二つほど上だつたと記憶する。大変なのんべで、その酔態は狂人に近い。もともと酔わずとも挙措動作すべて奇矯で、その貴族的風貌とても天才の趣がある。四六時中、中折帽のふちを切つたお釜帽を頭にのつけ、おんぼろさんぼろの膝や肱のぬけた背広を纏つている。チャップリンのようなドタ靴をつつかけ、飄々と長身の痩軀を運んでいる姿は、まさにロシヤ乞食そのままであつた。

彼の勤務先はM新聞社で、そこの校正係だが、彼は酒とともに深く音楽を愛した。随つてこの道の造詣は深く、権威ある音楽会の批評などは、他の追従を許さなかつた。垢じみた破れぶとん一組に、蓋のしまらないトランク一つという彼の全財産に、唯一の光つた存在はうず高いベートーベンやチャイコフスキーのレコードアルバムだつた。勤務の余暇をみては、彼はその幾枚かをかゝえ、喫茶店にと出かけていく。彼の青春は、一重にこの円盤のメロデーに尽きるかの観があつた。さてこの話は、その音楽にはじまる。

某日、彼は私の部屋に欣喜雀躍して現れた。

「恋人だ、初恋だ」

そういつて彼は、薄汚ない無精髭だらけの顎をふりたてラ、ランと部屋中をはね回つてみせた。行きつけのロシヤ喫茶店シベリアで、一人の少女と知り合い、シューベルトを通じて今日はじめて言葉を交した、というのである。彼の初恋はしよつちゆうのことなので、こちらは別に驚きもしなかつたが、明日また会うことになつているから君もいかないか、といゝその後は心のプリマドンナを讃える美句麗詞の連発だつた。幸いその日が休日だつたので私は暇つぶしかたわら、その美しき彼女とやらにお目にぶら下ることになつた。

シベリアは商埠地のなかで一番上等の、そして静かな喫茶店だつた。約束の時間に彼と連れだつて私は、その喫茶店の階段を上つた。

「あゝ、あそこだ、ね、もうちやんときているよ。」

と彼は、ホールの一隅を顎でさして、得意の鼻をうごめかした。

坐つてみると、思つたより綺麗な少女だつた。第一その眸のすばらしいこと、当年とつて二十五歳の私だけに、思わずその眼にぶつかると、胸がどきりとした。

少女の名はよし子といゝ、木曾町の白系ロシア人のところへ、声楽の勉強に通つているといつた。結構なご身分ですね、と私が言葉のつぎほもないまゝ、ぼそりとそういうと

「どういたしまして、七人の弟妹をみていて、まるつきりのおさんどん、ほらこの汚い手」

と彼女は、ものおじもなく、さゝくれ立つた赤い両掌を、顔の前にかざしてヒラ〳〵させてみせた。

「エライ……」

そう唐突にいつてKが、いきなりその手をとつて宙に二、三度しやくりあげてみせた。その無作法なKに、少女はたゞわけもなく上機嫌で笑いころげてみせるのだつた。

その後、私は少女と会わなかつたが、Kはしきりにそのお尻をおつかけまわしているらしく、下宿で私と顔が合うたびに、逐一少女との出会いを、得意にまた心ウキウキと話してきかせるのだつた。

そんなことがあつて間もなく、少女は満洲映画協会の女優さんになつた。そのお目見得の日、彼女は私の社に挨拶にきて

「今日から私は満洲少女よ、芸名は李香蘭、香蘭というのはお父さんが俳句をやる、その俳名を頂いたの、いゝ名でしよう」

と愛想よくいつた。

〝おさんどんの歌手、スターとなる〟

この記事はKが書いた。話によるとKが、放送局に彼女を売り込み、それに軍のお目がついたという次第だつた。Kは間もなく満映に入つた。彼女を追つかけて——ということに仲間うちの噂は一致した。しかし映画入りをしても彼の奇矯ぶりはやまず、こゝも永くは続かなかつた。満炭に入り採金会社に移り、それから後の足どりは不明だつた。たゞ最後の便りが、昭和十六年の春にあつた。

彼女をしのびながら、こゝ北満の果に……といつた感傷的な文面で、発信場所は黒河の旅宿であつた。

満洲から北京に転勤となつた私はそこで「李香蘭半生記」というのを書いた。その際、蘇洲胡同の自宅に彼女を訪ね、彼女と瓜二つの美しい母親から、彼女のむかしの写真をふんだんに借りうけた。シベリア時代の少女のときの顔もそのなかにあつた。そこで私は彼女に、Kのことをきいたが、なぜか彼女は不機嫌に黙して語らなかつた。

満映助監督だつた私の親友のHは、終戦直後彼女についてこう語つた。

「彼女はリコウすぎる女で、そのリコウさが、ある場合、おそろしく人間的な何かを傷つけている。名利名声を追つかけて、そのものを手にするまで、何ものをも辞さない。彼女は日本に現れたら、キット何かを丹念な胸算用ののちに決行するだろう」

と、この予言は見事に適中した。女優山口淑子としての、花々しい今日までの彼女の実績が如実にそれを物語つて余りがないから——。

さゝくれだつた掌を、空間にかざし、あどけなく笑つたあの商埠地の少女が、十余年後には日本に君臨するすばらしい国際女優になろうとは、果してKはこんな彼女をどう眺めつづけていたか。恩あるKに一顧も与えなかつた彼女は、果してKを全くの忘却の彼方に押し流しきつているものか、どうか。私は、とにかく、この利害の打算にさとい女性が、やがて来るべき日にどういう終曲をその手に受けとるか、それだけを、私なりの胸底でひそかに注目している。せめてもの、そう考えることが、Kの冥福を祈る友人としての、当然の行き方ともいえるだろうから……。まずはKへの思い出りまゝにこれを書いた。

# 新川柳鑑賞

麻生路郎

〔一〕

**電話口花千代さんは舌を出し**　豆秋

ところは色街、藝者姿のあでやかさ。受話器を手にして「待つてまんねで、ウソやおまへん、ワテ、べた惚れだんね。（と云つて、ペロリと舌を出す）みんなにひやかされてばつかり……照れくそうて〳〵（と云つて又ペロリと舌を出す）、來てくりやはれへなんだら、ワテ焦れ死に死んでしまいまんがな（と云つて長い舌をペロリと出す）、斯うした色街情景を巧みに詠んであますところがない。花千代さんが浮彫りされていて、この世界を髣髴させるところ、しかもユーモア味を感知させる技巧は作者の独壇場である。これこそ所謂豆秋ばりの句の上乘なるものか。

〔二〕

**石の床オカズは鼻で知つていた**　甲馬

病院の一室であろう。うごきのとれないギプス患者の心境をこの句は巧みにとらえていると思う。ジッと寢ていれば、そこには食慾の現実があるばかりだ。そしてきようのオカズは何かと云うことが大問題なのである。斯うした患者の常として嗅覚が異常に發達する。附添婦の説明を聞くまでもなく、今日のオカズは鼻が知つているのである。それは患者自身にとつては何んでもないことに違いない。それだけに、私たちはこれを悲劇として取扱いたい。そこを作者はキャッチしたのである。

〔三〕

**妻のみでなく藝者まで お父ちやん**　愁夢

いさゝか禿げて來たせいもあるが、人の善さからでもある。

# 鐵洲逝く

▼鉄洲・中島一二氏が胃癌を病み、八月二十日午後十一時四十分に、鳥取市川端町三丁目十五番地の自宅で永眠されたことは痛惜に堪えない。行年六十四歳。

▼中島一二氏は明治二十三年十二月二十日に鳥取市川端町一丁目三十四番地に生まれ、通称を義明と称されていた。こゝで永く中島鉄工所を経営されていたが、戦後転業され、現在のところで自動車の部分品の販売並びに修理を業とされていた。

▼氏は資性闊達で俗に言う器用人であつた。昭和三年四月頃から「川柳雑誌」に投句をはじめ山蔭の川柳会で重きをなしていた。昭和廿五年八月川柳不朽洞会に入り、その名吟ぶりをほしいままにしていた。氏は又郷土玩具の創作に特技をもたれその道の権威でもあつた。死ぬ五日前に

**去年買つた帽子がしきりに我を招く**

と云う句を詠まれているのを見ても、いかに再起を期していられたかがうかがわれて涙ぐましさを覚える。合掌。

**鐵洲氏を偲ぶ**　大西八歩

中島鉄洲さんが八月二十日午後十一時四十五分に亡くなられた。七月十日鳥取県東伯郡由良町の病院で手術を受けられてから亡くなられる間がわずかの日数だつたのでなんだか嘘の様な気がする。鉄洲さん自身もこんなにあつけなく死ぬなんて事は予想だもしてゐられなかつたと想う。家の人に聞いたのでは手術の時病気が已に手遅れになつていて医者は手当も加えず切開の場所をそのまゝ縫い直した丈だつたと言う事である。病人は胃癌であることを知らずに七月二十一日に退院され最近新築された自宅で療養をつゞけていられた。

僕に取つて鉄洲さんは親戚の間柄であり、柳兄であつた。二十五年前僕の処女作

堂ビル

三角の家に住む奴得意がり

の句を「三角の家に住んで〻得意がり」と添削していたゞき他の句と一緒に投句した処、近作柳樽に他の一句と共に活字になつた嬉しさは今だに忘れられない。その後永らく大阪に勤めていた僕が商用で帰鳥する度に鉄洲さんの鉄工所を訪ずれて時には「川端柳社」の柳人達と作句したものだ。川柳以外に趣味の多かつた。秋凉院音誉鉄洲居士の霊前には鳥取県工芸会、六鴻会よりの花環、鳥取県鉄工組合長を永らく勤めていられた関係上、関係各組合からの供え物が山と積まれ有りし日の有能人中島鉄洲氏を髣髴させた。死の数日前の句

**去年買つた帽子しきりにわれをまねく**

がとうとう辞世句となつた。僕は秋風を待たず五色の雲に乘りの追悼句を捧げて、鉄洲さんの冥福を祈つた。主人亡き新居の青畳の色がいつまでも目に残つた。

**鉄洲氏の霊に捧ぐ**　増田耕民

中島鉄洲氏は遂に亡くなられた。明朗闊達で一点の暗い影のない性格で有つた。交友関係も相当幅が有つたが柳人と言う立場だけは徹底的に堅持して各方面に川柳の認識を正しく深めた功績は実に大きい。短歌、俳句の方面にもそうした意味での交渉を持つて居られた様である。氏は又工芸人で特に郷土玩具創作の大家で其の創意が現在多く残つている。一般工芸にも造詣深く戦時中絶して居た此の方面の復興に努力し六鴻会の副会長として今後郷土工芸界の為めの活躍が期待されて居たそのやさきの長逝を非常に惜まれて居る。氏の工芸方面の創意趣向にもどこかに川柳的の味と香りをたゞよわせて居る点から考えても川柳の凝結体で有つた様に思う。

同年輩の柳友漸次少し

名木倒る跡の風情を淋しがり

「お父ちやん、ワテこつちにするわ。エヽでしよう。」
「ウム」
「姐ちやんにもコレ、エヽでしよう。」
「ウム」
何か、買わされたのである。
「お父ちやん、早よ帰りまひよ。お女将さんが待つてはるわ。」
「ウム」
斯くもお父ちやんは善人なのである。
まとを外ずさぬネライ、巧みな描写、句は生きている。

〔四〕

**御祈禱をパーマの上にして貰い**　ひかる

玉串がパツパツとパーマの上を右左する情景を想像しただけでも、おかしさがこみあげて來る。まじめくさつて頭を下げている女も一ト度口を開けば、自由がどうだの、男女同權がどうだのと云いかねないのである。実に皮肉な句である。ホン一寸したところをスケツチしたのであるが、捨て難い句である。

〔五〕

**母と言う乏しき髪に油きれ**　宵明

子を育てるのに懸命の母、家計のきりもりに身をけずつて來た母、世の苦労を苦労としないで闘つて來た母の姿は尊い。女の一生は斯んな狀態に安んじて終るのであろう。フト自分と云うものを顧みた時にはもう、髪も乏しくなつている。白髪も交つている。髪には油氣さえない。しかし、この母はそこに何んの不満も持つていないのである。

〔六〕

**接吻をしてと子供はもう五つ**　ひさみ

環境はおそろしい。時代は思わざる方向へと進んでゆく。
この子の母の日常生活が偲ばれる。斯うした子供の声に、顔を赤らめもしない若い母がどの位いるのであろうか。尠くとも、作者は人の子の母の心として愕然としているのである。一つの發見には違いない。

〔七〕

**取るものは取つて信仰足りません**　芳泉

半口語体の句である。表現上、「信仰足りません」の口語が句を軽く扱いすぎたきらいはあるが、穿ちの句としては一應うなづかされる。

川柳雜誌社特製
**投句用　柳箋**
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料　八円

# 鉄洲句抄

借りのない事も淋しき父にして
器に倣ふ水ともならば生き安し
竹を編む技を覚えて孤独なり
新円に折り目もつけず母の銭
立話五万円貸せ二三日
米を贈く音絶ゆるなど思はざる
商用に娘の便箋を躊躇する
落ちている櫛にふり向くのもみだら
エキスパートなどゝ煽て聴きに来る
女房まう先きに寝るのも憚らず
骨董を離す淋さ羨まれ
女工員に誘ひ出された花の宴
お手本になりきつて居る共白髪

新春譜

装いわなけねど春のミスポリス　うらぼん
架裟とれば何を憚る酒肴
吾を慰するに海の咆号
丸焼けになつて持つてた事が知れ
皺のないそれが白紙の命にて
頑強の利かぬを妻にねぎらはれ
人疑つてけふも暮れたり
貿易の失敗談を隠居持ち
鶏頭の花にヴアンプを想ふかな
喫茶店キツス売りますとは書けず
剃刀の光りが秋の身に迫る
里親に研いで貰つて二人剃り
銀行のドアーを風が一寸押し
鼻かんで貰つて敬老会に出る
切抜帳伴の為に残さんか
たまさかの儲を妻に誇りとす
追ふ声と呼ぶ声鶏も知つて居る
自由販売銭のないのをあからさま
休かと聞けば馘首だと正直な
酒臭く儲ける話して去りぬ
果樹は児に花は仏に庭狭し
雄弁会あの娘の末が怖ろしい
老人の部であり満で数えても
猫の怠惰に吾を重ねり
白足袋で元旦らしく過したり
水漠が垂れて虚勢の崩れたり
自転車に乗つても歳は偽れず
ペニシリンの値は病人に知らすまい
金融のついたとたんに歯が治り

母逝きぬ

不帰の旅一重の帯も重からん
母の座に母はおわさず二七日
集金え本社はストをして居ます
ほんとうに御気の毒なる腹上死
労動基準法で芸妓さんが来る
墓洗ふ孫言葉なく一周忌
昔の妓に逢えば買物籠を提げ
転び寝の素足に触れしものは秋

出雲句会にて

師と語れば不老薬にも及びたり

中陰

亡き母の煙管を持てば詰り居り
熊のゐと書きあり母の筆の跡

# 一路集

## 弁当

中島生々庵選

弁当のフタの茶柱もうれしそう　摩天郎
弁当え箸もつけずに酌ぎ廻り　賀峰
椅子席へ坐つて老母のお弁当　葉光
弁当が七ツ出てゆきホッとする　薫翠
弁当を恵み女教師記事になり　方大
汽車弁は思い思いに昼が来る　満佐志
弁当箱バチンコ屋から届けられ　恵二朗
弁当へ竹の子のシュンだなこ思い　同
弁当へかぶさるように女事務　満年
元気よく弁当持つて出るは出た　望峯
弁当でコースが変るハイキング　一飄
満員車窓から弁当リレーされ　呆声
ハイキング時計と別に正午が来る　正風
井がきて楽屋中昼になり　光郎
小走りに窓へ駅弁つりを出し　京一楼
空弁当迎えの子供がさげてくれ　一夜
弁当の煮豆が転ぶ事務机　古心
空腹へ駅弁又も買いそこね　加寿緒
おもむろに開く弁当箸がなし　凡九郎
病妻へバンにするよと笑つて出　好郎
弁当はいらぬ土曜の共稼ぎ　芳仙
腰弁も俺には俺の生きる道　高志
空折も共に酔つてる花の下　一朗
遠足の弁当虹のほうへ向き　谷水
弁当はうどんにも剛れパンに剛れ　香林
勤続賞まだ腰弁を続ける気　恵二朗
弁当が向い合つてる旅の窓　嘉一
バス嬢の弁当丈けが乗る停車　芳仙
弁当は手製二人に青い空　多久志
弁当の温みを抱いて並ぶバス　寛虚
素通りの故郷で駅弁一つ買い　多久志
妻と子が頼る弁当箱を提げ　水堂
弁当をまわらぬ舌で差し出され　望峯
弁当箱洗つて帰る共稼ぎ　寛虚
弁当をたべ〳〵話す嫁のこと　鮎美

## 手紙

大鶴喜由選

ただ逢えた嬉しさ手紙程言えず　菁花
謄写版で刷つた手紙は寄附のこと　水堂
たよりない子のお使へ副手紙　朝気
置手紙添わせてもよい気になって　多久志
甘えたい心ポストへ投げこまれ　英子
思出の手紙たんすの底から出　美能留
整形の万が一つに置手紙　洋史
手紙受女中に好きな人が出来　方大
しようむない事なが〳〵と娘等の文　香林
読んで行くうちに無心と知る手紙　（逸名）
どう見ても男が書いた手紙なり　木魚人
子の手紙ホームシックも一寸書き　牛歩地
代筆を婦長に頼むコルセット　十九平天
三毛猫も元気と甥の手紙なり　さぎす
わるいとことばして母へ読む手紙　方大
押花がひらりベットを見舞う文　悦子
女手の手紙へ一寸たかられる　一平
母の文父へ内緒の為替添え　好郎
下駄キチンと揃えた上の置手紙　京一楼
口紅がちよつぴりついた手紙が来　香平
焼きすてる手紙心へ刻みつけ　葉光
手紙だけいつも待つてる親心　良坊
父のくる手紙に一間かたづける　摩天郎
配達もお世辞で投げる女文字　満佐志
模範例首引きで書く悔状　太路
たまに来た手紙知りたさふれて居す　圭水
あの人に判る符号で書く手紙　雄々
手紙の嘘を知りつゝ貸してやり　鮎美
文面の程には歓迎して呉れず　凡九郎
手紙ではあなたと書けてまだ言えず　好郎
転落の娘へ綿々と母の文　桂角
ぎり〳〵の重さで母の手紙来る　トン坊
佳・幸福の手紙私で止めて置こ　朝気
佳・老らくの恋とも見ゆる歌を添え　蘇堂
佳・平仮名の手紙で母は夢のこと　光郎
佳・奉公も剛れて手紙の数がへり　とよ
佳・手紙受女中に好きな人が出来　方大
佳・にじませた涙も入れて娘の手紙　茶々
佳・蚊を棄つて獄からのたより　三林坊
佳・本心は別れてからの手紙にし　鮎美
佳・子の手紙母のポケッですり切れて　兼比羅
佳・子の手紙母のポケッですり切れて　牛歩地
佳・混血児母は手紙も書けぬまま　山雨楼

---

**大阪市民文化祭**

## 大阪市民川柳大会

**日時**　十一月十五日（日）　午前十時開場

**会場**　大阪市北区堂島　毎日新聞社講堂

開会の辞　司会　西村芳山
挨拶　亀山晴峰
講演「私と我々」　大阪市教育委員会　堀口塊人
同「古句と八軒屋」　本田渓花坊
同「人間手帳」　岸本水府
同「路郎放談」　麻生路郎
兼題「たばこ」　岡橋宣介選
同「出前」　松江梅里選
同「味」　脇田梅子選
同「労働者」　中岡三吉選
同「ピカ一」　土井文蝶選
同「期待」　木幡村雲選
席題　四題当日発表・締切十二時半

大会作品集代及び文化バッジを計五〇円を会場で頒布・席題各題の秀句一句に教育委員会賞及副賞、兼題各題秀句一句に市長賞及び副賞を贈呈・大会終了五時—当番幹事せんば川柳社

閉会の辞　田名部修三

投句用紙・官製はがき一枚につき一題二句
締切　十一月五日着限り

投句先　大阪市北区中之島市役所内
教育委員会市民川柳大会係宛

共催　大阪市教育委員会
後援　大阪川柳連盟
毎日新聞社

# 川柳の歴史

## ―四月の巻―

福田山雨樓編

**主要事件、行事、人事動勢等**

大正十五年四月七日渡辺虹衣「川柳はだか虫」出版記念川柳画賛頒布会を大阪大丸で開く。

昭和二年四月十七日番傘十五周年記念会を大阪北村で開催。同五年四月二十日番傘春興莚を天下茶屋で開催。同六年四月三日関西川柳団二十三名東京訪問、歓迎句会を西念寺で開催同七年四月三日関東川柳団二十六名関西訪問、歓迎句会を大阪芳雲寺で開催。同九年四月三日きやり十五周年記念川柳大会を浅草伝法院で開催。同年四月号むさしの誌で飴ン坊建墓基金収支報告を発表す。全国有志柳人の賛同で出来た墓。同十年四月九日から大阪阪急百貨店で若原静皷手ひねり川柳人形展をひらく、九年四月東京三越にて開催せしもの。同年四月号国語と国文学「日本文学研究史近世特集号」に田中辰二「川柳の研究」を執筆。同十四年四月号「話」に辻義利「川柳大平記――川柳雑誌は儲かつているか」を執筆。同年四月阪井久良伎は「隅田川の舟遊と川柳」と題して講演し皇太后陛下の台聞の光栄に浴した。同十五年四月三日奉祝紀元二六〇〇年きやり二十周年記念大会を神田明神社務所で開催。同月四日同大会参加記念として川柳レコード吹込みを行う。同年四月九日川柳懇話会を主として番傘、ふあうすとの同人によつて結成。同十八年四月ふあうすと川柳社は木綿川柳社と改む。同十九年四月四日〇丸還暦記念句会を西念寺で開く。句会中警戒警報発令される。

**主要圖書の出版**

明治四十年四月（以下何れも四月に付これを省略）幸堂得知著「略解時代狂句選」が博文館から。大正十年高須梅溪著「滑稽趣味の研究」が新正堂から。同十二年沢田薫著「末摘花難句注釈」が五猫庵から。同年尾山夜半杖編「第二回全国川柳名句選句集」が川柳名句会から。同年白石維想楼編「井上剣花坊句集習作二十年」が柳樽寺川柳会から。同十五年野畑謹爾編「類題川柳名句選」が洛東書店から。同年「絵入川柳柳樽」が大阪大文館から。同年渡辺虹衣著「川柳はだか虫」が奏山堂から。昭和二年岡田朝太郎著「寛政改華と柳樽の改版」が磯部甲陽堂から。同三年麻生路郎著「川柳漫画累卵の遊び」が不朽洞から。同年渡辺虹衣著「川柳家族風呂」が大阪出版社から。同年阪井久良伎著「雑俳及川柳研究――日本文学講座十六巻」が新潮社から。同四年川上三太郎編「新川柳大観」が草文社から。同五年田中辰二著「川柳と江戸生活――日本文学連講三期」が中興館から。同年白石維想楼編「井上信子弟二句集蒼空」が柳樽寺川柳会から。同七年野中水村編「彌生集」が野中元三郎から。同九年天谷糸人著「句集弾痕」が同氏から。同十年信濃毎日新聞社編「川柳句集ある街角」が川柳倶楽部から。同十年「同三集」が同社から。同十年善光寺二集」が同社から。同十一年和田黙然人編「新興川柳三人句集黎明」が川柳叢書刊行会から。同十二年宮尾しげを編「昭和川柳百人一首二編」が小噺頒布会から。同年和田天民子編「川柳昭和十一年持選集」が川柳倶楽部から。同十三年「同昭和十二年特選集」が同倶楽部から。同年長野軍四郎編「川柳句集車座」が川雑今治支部から。同十四年岸本水府著「母」が同氏から。同十五年「村田柳路遺句集偲びぐさ」が柳友会から。同十六年椹元紋太編「ふあうすと推薦句集」がふあうすと川柳社から。同十七年三宅巨郎編「川柳翼賛」が日本文化研究会から。同年森東魚著「川柳霹靂火」が同氏から。同年正木柳建寺著「輝く青丘人」が朝鮮川柳社から。同十八年石曾根民郎著「川柳を知る心」が同氏から。同十九年嶺寅好著「句集弾痕」が同氏から何れも出版。

（追補）明治四十一年六月「俳風柳樽巻一」が橋南堂から。同四十四年六月饗庭篁村編「近世文芸叢書九巻川柳」が図書刊行会から。昭和四年六月高田峰雪著「古今名句川柳漫画藏ざらへ」が大阪十字屋から。同十五年六月母袋光雄著「川柳江の島土産」が古川柳研究会から。明治二十四年七月岸上操編「古今狂歌狂句集」が博文館から。昭和九年七月山崎麓著「川柳雑俳概説」岡田朝太郎著「川柳史」――何れも日本文学講座八巻――が改造社から。同十六年七月岡田三面子遺稿「川柳日本史伝」が磯部鎮雄から。昭和九年八月穎原退藏著「雑俳書解題――続俳句講座四巻」が改造社から。同十五年九月春原源太郎著「川柳と法律」が同氏から。大正十四年十月岡田三面子、西原柳雨共著「川傍柳評釈初篇」がよのころ社から。同年十一月能勢久一郎編「眉斧日録初篇――古川柳叢書一編」が同氏から。昭和三年十一月篠田一編「柳多留三篇飜刻」が柳書刊行会から。同五年十二月前記「川傍柳評釈三篇」がよのころ社から何れも出版。

**主要柳誌の興廢**

明治三十八年四月大阪から六厘坊らによつて「新編柳樽」を月刊す。同四十年四月（以下何れも四月に付これを省略）神戸から「柳」。同四十二年岐阜県大籔町から「青柳」。同年東京から「矢車」が何れも創刊、「矢車」は荷十らによつて三十一号までつづく。大正五年岡山から鉄羅漢らによつて「かささぎ」創刊、三号まで出る。同八年金沢北都川柳社から「百万石」創刊、昭和三年五月六十六号までつづく。大正九年東京から「きやり」創刊。同十年東京から而笑子によつて「媛柳」創刊、昭和三年十一月九十二号で終る。大正十一年大連句帖舎から「通」創刊、昭和八年までつづく。大正十一年岡山県から「関西川柳」、金沢から「青柳」、足利野郎会から「ふところ手」が何れも創刊。同十二年横浜から余念坊らによつて「あしかに」、京城から巷頭子らによつて「芽やなぎ」が何れも創刊、「芽やなぎ」は同十三年三月までつづく。同十二年「新生」と「小康」と合併、「新生」は十号限り廃刊した。同十三年博多豢骨吟社から「竹の子」、同十四年山口から「手」、天津から「ホコリ」、大阪から「煙」、同十五年小樽から「はらうご」、昭和二年京都から「葵」、石川県から「鳳」、京城から「川柳三昧」、石川県から「川柳趣味と研究」、同三年大阪から「たまむし」が何れも創刊。同四年「蒙古風」と「長城」とが

合併されて「天津」として創刊。同年大阪から出ていた「大大阪」休刊。同五年大阪の川柳使命会から「川柳時代」創刊。同年撫順から「川柳蛇皮線社」創立。同年大連川柳社から「青泥」、東京から「五色墨」、同六年函館川柳社から三休、花童子らによつて「かむゐ」、北海川柳社から白白眼子らによつて「漁火」が何れも創刊。同七年大阪川柳同舟会から「昭和自選句集」が月刊として出る。同年東京から「鳴子」創刊。青森から有石らによつて「はとば川柳社」創立。大阪から「撫子」創刊、会員は処女のみ二十名。横浜から里光らによつて「つぼみ」が何れも創刊。同年愛媛大洲町から「肱川柳」創刊、三号まで出る。同八年東京から黙六らによつて「柳友」創刊。同年東京から「川柳やなぎ」創刊、三号までつづく。同年岡山県倉敷市から「立体川柳」、同九年近江八日市から「飛沫」が何れも創刊。同年京都から川柳友達の会によつて「黄母衣」が創刊されたが二号は出なかつた。同十年東京から出ていた「うきよ」、京都から出ていた「川柳紅椿」が何れも休刊。同十一年東京から「放水路」、博多から「おきな筆」同十二年大阪川柳社から「川柳国」が何れも創刊。同年東京から「蒼空」の改題「川柳人」復活。同十三年「川柳むさしの」は「風詩むさしの」と改題。同十四年松山から「川柳伊予」創刊。同十九年神戸の「もめん」休刊。

**著名川柳人の他界**

青野林鐘子（東京）は大正九年四月十九日三十二才で逝く、大正川柳で活躍した。西原柳雨（東京）は昭和五年四月二十七日福岡で入院中六十六才で永眠、古川柳研究家として著書多し。藤原遊二郎（大阪、俳人游魚）は同六年四月十三日六十代で病歿。同日沢井朱唇子（大阪）逝く、川雑創刊以来の投句家。同月二十五日野口粋月（神戸、川雑支部同人）逝く。山本左畔（大阪、番傘投句家）は同七年四月三十日四十才で他界。同月十五日土見秋晴五十二才で永眠、神戸で一番古い川柳家。漫画家吉岡鳥平（大阪）は同八年四月二日逝く、川雑客員として表紙絵を寄せられた。瀬川章太郎（東京、三柳吟社同人）は同十年四月十六日に、松橋嚮村（京都、双ヶ丘川柳社同人）は同月二十一日三十四才で、福間布照（鳥取、伯耆川柳会同人）は同月何れも他界。佐野大日輪（福岡、柳樽寺系）は同十二年四月二十六日逝く、福岡日々柳壇で活躍した。長尾風来人（岡山、川柳二葉会主宰）は同十四年四月二日六十才宇治山田市で永眠。中山七九（松阪、ふあうすと川柳社元同人）は同十七年四月十二日逝く。岡村和郎（尼崎、川雑支部同人）は同月十五日三十二才で逝く。関本雅幽（大阪）同月十九日四十六才で病歿、川雑旧同人で多くの名句を残した。二田玉砕（青森、北柳吟社創立者）は同十八年四月二十五日五十七才で永眠。森雞牛子（大阪）は同十九年四月十七日五十二才で病歿、大阪媛柳川柳会を興し三味線草を出した。阪井久良伎（市川）は同二十年四月三日七十七才で永眠、明治中興の恩人として剣花坊と並び称された。

# 柳界展望

▼本社十月句会は三日（第一土曜）午後六時から下寺町二丁目の光明寺で開催される▼大阪通信病院川柳会は九月廿六日午後二時から三階図書室で開催▼南区医師会文化部杏林川柳会は九月廿二日午後七時半から兎庵居で開催▼南海電鉄川柳会は九月廿八日午後六時から粉浜の親和寮で開催▼大阪市警視庁警察部警察学校文化講座（講師・麻生路郎）は九月四日午後三時から開講▼川雑弓削支部（岡山県）主催西日本川柳大会は九月廿日午前十時から弓削小学校講堂で開催▼大阪市交通局秋季川柳大会は九月廿七日午後一時から天王寺運輸仮泊所楼上で開催、以上何れも路郎主幹出席▼楽々園納涼川柳大会が広島川柳人によつて八月十六日に郊外の楽々園で開催された▼水島公民館川柳の会（倉敷市）が八月十九日に同館で開催された▼川雑備前支部句会（岡山県）は八月廿二日娯句楽居で開催▼体温川柳会（貝塚市）は九月例会を五日に集会室で開催▼川雑弓削支部句会（岡山県）は九月五日に金光教会で例会開催▼小島祝平一周忌追悼句会（津山市）が九月六日愛染寺で開催された▼ラジオ新潟放送川柳（選者・伊藤蘇子氏）は毎月十五日必着、宛先は新潟市古町ラジオ新潟編成局川柳係▼八月十三日NHKテレビでは川柳と漫画を放送▼横浜川柳懇話会と横浜市教委との共催で九月十三日からの横浜市民文化祭に川柳行燈まつりを行う▼小倉へとち氏（八月廿七日夜東京にて）三等車に新聞紙を敷いてゴロ寝して上京する。旅費稼ぎに非ず。使用人は三等車が内規なり。五斗米に腰を屈するものの悲哀なり「汽車公平みんな同時に江戸につき」東京は先週来雨、雨、雨で半袖姿は見られず薄い毛糸の上衣を着る娘子軍多し。夜布団をかけて寝ますと▼高木不朽氏（愛媛県）が文化と改号された▼川柳噴煙吟社幹事長甲斐田桜里氏（熊本市）の母堂が八月二十五日に八十歳の高齢で永眠された謹んで悼む▼庄万よし氏（大阪市）は社会党の党員で世話好きな安藤国松君の墓碑建設会の世話人代表として清水谷東之町蓮華寺内へ碑を建設された。

**正誤**

▼九月号三〇頁一段三〇行目の杏林川柳会の記事信貴山一泊吟行は中止されたので取消す▼三〇頁柳界展望三段目終りから三行目麻生路郎のBK放送は二十六日午前七時半「関西の話題」の時間に放送▼一六頁上段一行目苦泉は芳泉の誤り▼二〇頁上段二四行目小果は小林の誤り

## 本社十月句會

日時　十月三日（土）午後六時
場所　天王寺区下寺町二丁目　バス停留所前　於　光明寺
兼題　「肩書」路郎選　「家風」古方選　「青年」淡舟選
柳話　麻生路郎
句評　水谷鮎美
—参会歓迎—

# 俳句

いのちある句を創れ

**投稿規定**
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

## 雑川 梅田支部句會（大阪市）

八月十日　於　阪神ビル四階
水谷鮎美報

仲よしの話が長い別れ道　杏花
仲よしも案外金に水臭し　夢生
仲よしの手紙はあだ名など混り　春夢草
仲よしのお屋のおかずっき合い　圭三
仲よしも割勘でゆく友であり　酔華
仲よしとてる〳〵坊主てる坊主　しげを
仲よしが黙つて花火見てる舟　ゆずる
逗留の母が梅干漬けて去に　一路
梅干はきらい達者な児に育ち　紫香
梅干の事こま〳〵と里の母　へとち
幹事うれしく朝の匂いの浜づたい　鮎美
酒好きな幹事朝酒つけてくれ　圭三
お茶漬けになつて幹事さうまが合い　水客
女中部屋で幹事は少し横になり　白溪子
日傘のつもりか相変らずアンブレラ　古方
金時を三ッ頬みに来た日傘　紫香
俄雨日傘を濡らすのが惜しい　正斗
花蕎麦は日傘を秋の気配にし　水客
買物が両手日傘を忘れて来　一夜
おしまいは裸になつたクラス会　凡九郎
椽側の裸わが家は矢張りよし　杏花

## 川柳雑誌社ハワイ支部 ウイロー社句會（布哇）

四月五日　於　柳云亭
築山快夢起報

嫌ですよお馬鹿さんねこ児をあやし　笑有
嫌味など云へない父で米もとぎ　暁舟
熱い茶に替へて不機嫌には触れず　草一郎
逆立ちでやつとおさまる子の機嫌　快夢起
領収書減らぬ集金嫌になり　芳雨
嫌ひだつた筈に三人目を妊み　魔花麗
一度着てもう下女にやるいいドレス　野渉
嫌ひですがはつきり云へず子に当り　保枝女
嫌ひだが又もろて来た猫の雌　拝山
嫌はれて居ても死んだら拝まれる　煙波
表面は嫌ひに見せて腹はすき　紀南児
僕が来たので役員会の座が白らけ　純香
良縁を嫌ふ我子へ不安もち　泉水
雨降りに嫌とは云はぬ送り傘　孝雄
嫌ひとも云へず茶漬へ気を替える　自然生
昇給の機嫌一本追加させ　柳葉
なびく身も一度は嫌とすねて見せ　峰雪
晩酌の機嫌へ妻の下心　迷朗
カブリ振る子の難癖を嫁に付け　彩明

## 雑川 岡山支部句會（岡山市）

七月十二日　於　山陽旅館
大森風来子報

捨て猫をうつかり撫でて住み付かれ　美婦適
失恋が動機さつぱり見栄を捨て　枯葉
捨てるところばかりで海老の皮をむき　大甲帽
捨子とも知らずマイクは呼びかける　呑風
両親を捨てた男に見捨てられ　三葉
ホルモンの効目顎ひげばかり延び　恵二朗
パン〳〵へホルモン料理奢られ　格一
お隣りの二号にホルモンすすめられ　地久平
愛情をつなぐホルモンとは淋し　方大
別々に来てホルモンを夫婦射ち　白柳子
ホルモンの多いところは猫にやり　忠美
若返るどころかホルモンヒスにさせ　真
舞扇子供があるとは思われず　節子
舞扇そのまゝ師匠風を入れ　宇柳
目出度さは季節外れの扇子持ち　萬古
肩書があつて扇子へ書かされる　白頭
世渡りへ古い肩書邪魔になり　東岸子
子を持つてから人の子に世辞もいえ　八ッ茶
一人で育ち世渡りけつまづき　風岸子
世渡りの事にも触れた説きよう　牛耕
世渡りへ作り笑いの癖がつき　九坡
世渡りを女房の智恵に助けられ　千石
愚直には愚直で生きる道がありビールびん見たで小言はしまつさき　千容
送金を頼めば小言だけが着き　鶴子
毎日の小言へ子供なれて逃げ　笑気坊
畑仕事亡父の小言へつき当り　耕水
小言にはならぬ不満を母が持ち　久米雄
御先祖を守る次男の不倖　ペン郎
本家には先祖の墓が小さ過ぎ　美能留
大臣に先祖の墓が小さ過ぎ　十九平

## 雑川 淀川支部句會（大阪市）

八月六日　武部香林報

けちんぼの紅茶だん〳〵薄くなり　英一
けちんぼが見直されてる蠢捐金　礼三
湯上りの裸へビール冷えており　信雄
西瓜切る気配裸になる子供　都詩子
命まで裸になつた手術台　若菜
犬ころし住民登録公務員　英一
公務員も喰わねばならぬ夏季斗争　六竜子
公務員こゝの暮しも手内職　水堂
公僕の下役だけが左派最屓　同
官舎まで来る贈物に妻おそれ　水茶
公務員虚栄の妻に負かされし　若菜
収賄の罪に問はれしかくし芸　祈三
精励恪勤印押すだけの公務員　花村
表彰も順繰りにくる公務員　同
公務員パンで済まして蠶を立て　香林

箕面偶会　八月四日

瀑音と別にラムネを抜いた音　玲人
裏道の茂みへしばし陽と別れ　同
原料は無尽蔵です紅葉揚げ　花村
昆虫館母の嫌いな虫も居り　同
仲好しが滝に言葉をかき消され　香林
裏道を行き名園に迷い込み　同

## 雑川 備前支部句會（岡山県）

七月十八日　於　久米雄居
浜田久米雄報

ひようたんの置場に困る大掃除　八重子
ひようたんの酒に未練の残る朝　詩郎
ひようたんの麓も払うて客を待ち　運平
ひようたんをほめて一杯又さされ　浄美


**阪田謄写版**

大阪市北区芝田町二五

株式会社 阪田商会

電話 福島五九九一番
五六三一～四番

かみなりが何処かでなつている昼寝　東岸子
珍品と言ふひようたんのいがぐり　柳穂
蚊柱をぬけて浴衣が二ッ行く　半仙
蚊のあごがはずかし夏のニュールック　甘井子
又しても蚊張の蚊を焼く子沢山　清風
一角を残した蚊張で朝寝する　正州
負け惜しみ言ふ子に祖母の手がやさし　駄流児
世の中はさびしかりけりアルバイト　久米雄

雑川　**日立櫻島支部句會**（大阪市）

七月十五日於　日立造船所

真鍋一瓢報

思い出の浴衣は干してあるおもっ　白呂
涼み台浴衣の柄を見て貰い　平三郎
浴衣着て見てもやっぱりうちのマヽ　碁洲
潮やけの猪首が目立つ浴衣がけ　呑水
貸浴衣も交つて夜の観光バス　一瓢
産制をすゝめた人も孕んで居　玄米
産制を怨む日もあり子に死なれ　ひさみ
家計簿の隅に小さく産制費　一球
失恋を捨てに来て居る片山津　春猿
失恋をたゞ酒だけが待つて居る　巨船
捨てられてからの女の末生流　京花
失恋の相手むやみにけなしたく　浮雲
失恋へ男アドルム呑むときめ　清潮
失恋が痛手にならぬ歳になり　牧湖
失恋へ金の恨みを残すなり　望峯
失恋へ波紋残して散る若さ　秋花
失恋の耳雨を聞き風を聞き　芳扇
捨てられた恋へ女の死の抗議　潮花

雑川　**下關支部句會**（下関市）

八月九日　於　武久海水浴場

石川侃流洞報

初盆は母の精霊むかえる火　伊三郎
精神科教祖であつた人も居り　戊理智
精神科は附添い固く口を閉じ　九呂平
涼み台巡査へエシャクした裸　同
針先きにとかれて絹のもつれ糸　かうたる
鉄格子一重狂える眼に出会ひ　要揚子
気の急ぐ仕立え系のもつれてき　司楼
看護婦も馴れきつている精神科　同
子のかけた糸のもつれを叱りつけ　柳慶
裸天国夕日そろ〳〵沈みかけ　同
賽銭の匂いが汗の手に残り　藤市
裏口へ裸で帰る海の家　蘇人
汗一つ見えぬ真夏の登山隊　米三
じれつたいもつれた糸を歯に挿りて　妙法寺
精神科母がのぞけば素直なり　半休門
家業にも馴れ初盆の灯明を供え　倪流洞
出来過ぎた過去が哀しい精神科　同
裸天国川は澄みきるひまもなし　みつ子
初盆の父の羽織が良く似合い　ほなみ
お神輿をかついだ若さまだ抜けず　良坊
捜査部はまたも振り出しから初め　同

雑川　**堺支部句會**（堺市）

堺水族館開設祝賀川柳会

八月三十日　於　水族館

八木摩天郎報

亀の池と間違えてます手をたたき　明鳥
海亀の背に古武士の影を見せ　たかし
海亀の暗さに馴れてみぢろがず　角嵐
海亀の喜怒哀楽が寂しすぎ　生々庵
海亀の愛嬌という首をみせ　歌津美
海亀へ乗りたい子等の眼が動き　弘平
眷族をつれて蛋取る猿の島　雄声
猿の島カメラえ白い牙を向け　左久良
子が欲しい夫婦に猿の島愉し　徳三
大安寺の絵襖しのぶ猿の島　摩天郎
キャラメルが一ッとどいた猿の島　今雨
陽溜りが右え変つた猿の島　左久良
猿の島ボスへは坊や餌を投げず　生々庵
良寛に遊んで欲しい磯の蛸　呉舟
蛸ある日いそぎんちゃくにけつまづき　春翠
水族館ガラスと知らぬ蛸の抚　鹿の子
蛸つぼの蛸ルンペンの様に居る　羅生
大漁を蛸は淋しく見て戻り　玲人
愛慾のポーズを蛸も心得て　水客
貝細工足どり軽う子が戻り　摩天郎
貝細工伊勢路はすでに秋に入り　今雨
宿題の机の中の貝細工　玲人
貝麿工其日暮らしの手にぬられ　葭乃
女の子らしく土産は貝細工　杏花
御本人は昆布茶の訳を知らず出し　たかし
酢昆布を旅の夜長に喰べ明かし　雄声
神楽料鈴ふりかけて昆布呉れ　湧泉
お燈明あげて昆布茶で旅立たせ　鮎美
昆布の砂拭いてめでたい台所　角嵐
浦島へ珍味は海の物ばかり　呉舟
水族館竜宮族の出開帳　湧泉
竜宮は大水害のない処　英二
浦島の欠伸に竜宮気を使ひ　葉光
竜宮の亀はメータ制で乗せ　貴山
昆布林浦島さんとぬけた道　同
ブラカードの列竜宮をくぐり出る　水客
月賞めに出て甲板で疑はれ　貴山
舟酔へまだ燈台の灯が見えず　杏花
船長が名付親なり児が産れ　鮎美
船旅の嵐も海の魅力にて　葭乃
デッキゴルフに見えるは青い海ばかり　徳三
アメションがデッキで開く会話辞書　鹿の子
果樹園が待つ船旅の一家族　同
蛸或日墨がきれてる事を知り　打風
初旅に銅鑼はさびしいもののうち　路郎

雑川　**弓削支部句會**（岡山県）

八月八日　於　金光教会所

福島鉄児報

押売りへ唐手の構え一寸見せ　一貫
怒らしちや損の樟脳を一ッ買い　牛歩
帰り道丈けは子供も負われる気　不老
雷が追い付きそうな帰り道　久米女
雨傘が車になつた帰り道　奇童
閉め出しは覚悟の上の酒を飲み　笑泉
奥さんが泣くおこバーを閉め出され　大戸
閉め出して見たが可愛いい心起き　白頭
閉め出しへ期待外れの朝戻り　久米女
閉め出しがしてない今日は月給日　竹風
閉め出した女房の方も眠られず　七面山
夏服は不用抱えたまゝ戻り　鉄児
時価相場言ふて神木抱えて見　牛歩
下戸一人居つて気兼ねな祝賀宴　令甫
二次会へ断り切れず下戸も行き　桃々
すき焼は下戸が大方平らげた　弓削平
下戸またもなだめる役に廻なるり　同

小児科
内科
性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南㊱三二四六

乾盃へ下戸もグラスを高く持ち　久米女
下戸は下戸好きな相手で夜を更かし　鳴子

雑川　**大聖寺支部句會**（石川県）
七月十日　於　那谷光郎居
野村味平報

バスがゆれお召が飴の手を恐れ　かづ子
通勤バス同じバッヂの喋ること　光郎
こけながら子供をかばうバスの中　笑平
バス降りて急げば葬儀出るところ　桃園
まだ剛れぬ入歯はずして母休む　とよ
掃除してる入歯剛染に見付けられ　酔羊
追伸へ母の入歯も書き添える　光郎
相傘が別れてはいる町の風呂　かづ子
好い身体して日稼が威張る風呂　高野

八月十四日　於　桑山とよ居

つまづいてからは親類寄りつかず　桃園
抜き足がけつまづいてる台所　卓風
お元気が満ちて居ますニキビほめ　和子
雨宿りデパートの包一ッさげ　酔羊
雨宿り美しい娘を見て帰る　とよ
あきらめて小降にぬれる雨宿り　光郎

雑川　**浜寺病院支部句會**（大阪府）
膳所新三報

夕涼親は花火の火付役　秀麗
なごやかに花火囲んで一家無事　溪泉
花火にも女虚栄を競い合い　勢園
海ひらく花火がベットからも見え　風鈴
油照り氷屋丈が目に止り　夢郷
王手といつては氷一さじ口にする　小雀
子の氷うまくあやしてへつられる　漫多楼
顔なじみになつて氷のミツがふえ　貞春
女連れ氷小豆でよくしやべり　南野

**川柳友の會**（大阪市）
七月十日
於　帝国化工大阪工場
佐野牛歩報

その癖がわざわいしての平社員　寛峯
結論へ盛んにあごをなでる癖　島浦
又癖が出て獄窓に悔の身を　笑治
片親が欠け盗癖の子に育ち　京一楼
倦怠期癖と癖とがいがみ合い　雅楽太
父の癖又街頭のヤシに買い　牛歩
宵祭り仕掛花火にどつと来る　辰始
打ち上げた花火に映る都会の顔　乱酔
我が恋も花火の如く消えてゆき　のぼる
打上げた花火団扇の手を休め　京一楼
夏の夜仕掛花火が団扇止め　一朗

南区医師会　**杏林川柳會**（大阪市）
七月廿一日　平尾太希志居
南　捨舟報

大雨に借りてた傘を思い出し　生々庵
大雨を口実にして腰をすえ　珊枝郎
大雨にもう見えもなくまくり上げ　生々庵
飲むのならこの大雨に来ると云う　路郎
純綿のお茶漬などと云つた頃　阿茶
結局は茶漬が一等うまかつた　迷路
飲む程にぶゝ漬などは聞き流し　一哲
お茶漬で育つた癖が抜け切れず　同
出しようで珍味に勝る茶漬なり　珊枝郎
お茶漬の数にも父の老いを知り　瑞川
お茶漬を出したは酒が切れた事　生々庵
馬鹿さわぎケロリ忘れて茶漬なり　瑞川
お茶漬は皆学校へ出してから　路郎
お茶漬がすむと銀行まで出かけ　路郎
税務署で髭も盛んにおじぎをし　一伸
口髭の生えて来そうな女史であり　阿茶
口髭が出て押売りは荷をしまい　一伸
口髭が時間励行組にいる　路郎

**荒木哲水追悼句會**
八月九日　於　箕面滝安寺
黒川紫香報

滝からの風に鎮る新仏　二桂
面影がまだ生きてゐる蟬しぐれ　紫郎
虹の遺句われより若き人が逝く　花村
今頃は運のうてなであの目付き　生々庵
思い出は君と撮つた吹田寮　ゆずる
箕面滝今日も同じ音で落ち　圭三
薫る風気軽な君がふと浮び　紫香
萩桔梗還らぬ君となつかしむ　文蝶
慧星が流れた様な君の死よ　淡舟
短命へベスト尽して生きた君　一路
澄み切つた心で渡る虹の色　水堂
亡き人を忍ぶ句会の蟬しぐれ　悦朗
雲の峰なすこと多き眼を閉じる　水客
君の声が大空から降りてくるよ　鮎美
滝安寺君偲ぶべく偲ぶべく　路郎
父ちゃんの電話ウンウンウンで切り　島浦
商談の電話ミナミで待ち合せ　玲人
愛情が縺れたらしい三通話　水堂
会うてから云ふと電話を切つておき　博也
避暑先の電話ひぐらし鳴いてゐる　春夢草
やはり獣目だつたか受話器をそつと置き　扇子仙
電話口花千代さんは舌を出し　豆秋
電話でのぼろくそ会（ばあやまる）気　ゆづる
電話口君哲水の死を知るや　日本村
電話では咳きつゞけたり笑つたり　鮎美
お燈明運の毛彫も浮んで来　花村
澄明えやつぱり愚痴になる心　翩骨
燈明も消えて後妻の来る話　貴山
商魂は道まで店を出して売り　圭三
生甲斐を感じて人の世話もやき　香林
後悔はせぬ信念の道をゆく　紫朗
生甲斐は四十の年の舞扇　杜的
病床の友に生甲斐教へられ　雄歩
酒煙草絶つ生甲斐を不思議がり　夢生
妻君が行けば融通利く酒屋　文蝶
家計簿の事では妻に負けて置き　杏花
女子大を出てむつかしい妻のぢ　恭子
寝られてはこまる女房の肩をもみ　一夜
親のない児等へ消えるな虹の橋　若菜
雷が忘れて行つた虹の帯　生々庵
国境虹は因幡の方で消え　紫香
立退かぬ家がぽつんと虹に建ち　水客
虹の丘ペタルを踏んだ娘が降りる　裸木
借傘の荷になる虹の美しさ　山風楼
燈明へまだ言ひ足りぬことを告げ　淡舟
燈明に故人の酒量話しあい　香林
燈明へ父ちやんですと子に教へ　賀峰
別荘が邪魔になつてる虹の橋　一路
虹消えて早い夕餉の膳につき　白溪子

東京そばと
灘一とすじ
アベノ橋地下映画食堂街
梅里の店
大萬
★大万川柳（第卅一回）を募る
兼題「胡坐」路郎先生選
締切・十月十五日（句数五句以内）
発表・十月廿一日（店内に掲示）
御投句は大万宛・どなたでも

# 待望久しき

## 麻生路郎句集

麻生路郎著　田村孝之介装幀

定價　円百八
特約予價　円百七
留書　円百　〒
菊半・　頁余百七

本書は著者の川柳生活五十年記念出版として、川柳不朽洞会員が主動体となり、天下の名士、並びに柳界の名家多数の賛助を仰ぎ、路郎句集刊行会の名により上梓される世紀の書であつて、この好機を逸したら再び手にすることの出来ないものである。即刻申込まれたし。

### 路郎句集刊行について

柳壇の巨匠麻生路郎先生の川柳生活五十年を記念して、茲に待望久しき路郎句集「旅人」を刊行致すこととなりました。

路郎先生が初めて川柳に手を染められましたのは明治三十七年の春で、日露の風雲は正に急を告ぐるの時でありました。多感の青年路郎は大阪が生んだ天才小島六厘坊の不屈の精神を継承して精進又躍進、その地歩を踏みしめつつ明治四十二年頃から川柳革新の情熱に燃え「雪」「後の葉柳」「土団子」等の革新誌を刊行され、「われ柳壇の子規たらん」との悲壮なる決意を抱いて新川柳の質的向上に奮闘されたのであります。更に大正十三年には新たなる川柳観に立つて川柳雑誌社を創立、機関誌「川柳雑誌」の菊版、毎月発行を断行され柳壇に一大センセーションを捲き起すと共に、川柳の社会化運動に一層の拍車をかけられたのであります。爾来三十星霜その間不退転の経営をつづけられ、終始一貫挙げて川柳の向上発展のために身命を賭して尽瘁されたのであります。しかもこの間内にあつては常に清新にして尖鋭なる作品を発表されて問題を投げ、或は詩野を拡大して柳壇注目の的となり、孜々として句作に倦むことなく熱心忠実今日迄約三万句を生んでいらるるのであります。一方川柳塔、近作柳樽をはじめ課題吟、募集吟、句会吟、吟行等の選句には三十数年間寧日なき有様で、その数無慮数百万句の夥しきに及んでいるのであります。又外にあつては評論、感想、随筆等に毎月渝らざる健筆をふるわれ、一度壇上に立てば滔々懸河の熱弁をふるい正論を吐いて聴く者に深き感動を与えられました。その他幾多の意義ある川柳大会、川柳の夕等を開催せられ縦横の活躍をなされると共に、常に柳壇の第一線に立つて人間陶冶の詩、川柳信奉の権化となり東奔西走、その行脚の足跡は内地は元より遠く鮮満北支蒙疆の地に迄及び、しかもなお席の暖まるを知らない有様であります。他面文化団体及び後進の指導啓発に、放送に、揮毫にも常に心血を濺がれているのであります。

斯様な次第で柳壇の信望を一身に集めていられる先生の真骨頂を表わす句集刊行の義は、従来一再ならずして起り柳壇をあげての待望であつたのでありますが、先生には多数の川柳図書を出されたにも拘らず、自己の句集に対しては慎重熟慮容易に手を下されなかつたのであります。この度は最も記念すべき先生の川柳生活五十年に当り、門下後進の懇望もだし難く遂に意を決して刊行に快諾を与えられました。本句集は即ち情熱詩人路郎先生が鏤骨彫身真にその血脈を伝うべき好個の記念塔であり、先生が常に警められているところの生命ある句の結晶であります。われわれはこの名句揃いの本句集を愛誦することによつて、人間路郎の影像が何よりも明らかに浮彫されていることを知り、同時に透徹せる先生の人生観、世界観が句の背後に蔵されていることがわかり、小説全集にも比すべき人生、世相の縮図が繰りひろげられていることに気付くでありましょう。編集装幀には従来の常套的な規範を脱して独特の構想、用意がこめられており心ゆくばかりの鑑賞を待ち設けております。

天下の川柳人諸兄姉は申すに及ばず、あらゆる階層に亘る人士、家庭に職場に一本を備えられて、巨匠が身を以て提示された川柳の真髄に対し味読と清鑑を賜らんことを希います。（中島生々庵）

▲本書は五〇〇部限定版ですから予約申込が定数に達したら申込締切日前でも締切ります。至急お申込み願います。
▲予約申込は刊行会でも雑誌社でも便宜な方へ願います。
▲予約申込（前金）に限り特価七百円書留〒百円締切後は定価八百円に復元します。▲—予約申込の分希望により扉ページに著者署名—▲締切日九月末日　発行日十月廿日

麻生路郎川柳生活五〇年記念

發行所　路郎句集刊行会
会長　中島生々庵
大阪市南區三休橋筋詰
中島小兒科診療所内

發行所　川柳雑誌社
大阪市住吉區万代西五の二五
振替口座大阪七五〇五〇番

# 路郎句集「旅人」刊行賛助者芳名

（ABC順 敬称略）

詩人 安西冬衛
高知放送局長 安部忠三
大阪府知事 赤間文三
東大教授 文學博士 麻生磯次
衆議院議員 有田二郎
画家 赤松麟作
新潟大教授 古句研究家 阿達義雄
松坂屋 宣伝部長 安達恭二
大阪市議 天野要
俳人 朝比奈隆
新日本放送局 放送部長 龜村正治
古句研究家 姪子省二
静岡川柳社 榎田竹林
詩人 藤村雅光
画家 福富雷童
東大名誉教授 文學博士 藤村作
作家 藤澤桓夫
京都川柳社 藤本鬼華
古句研究家 冨士野鞍馬
大阪府警察部長 会長 藤原哲
青森縣川柳社 後藤蝶五郎
京都川柳社 後藤千枝
米子川柳 金曜会会長 後藤至極
醫學博士 長谷川一徹
岡山縣 大原町長 本田晴男
近畿 常務取締役 檜原敏郎
せんば川柳社 堀口塊人
大阪女子大 學長 平林治德

川柳人 東野大八
朝日放送局長 平井常次郎
関西藝能倶楽部 常務理事 日比繁治郎
俳人 日野草城
川柳人 速水真珠洞
川柳人 本田溪花坊
大阪日日社長 石井寿一
関大教授 井上吉次郎
俳人 入江来布
演出家 巌谷真一
歌人 今中楓溪
大阪大學長 醫學博士 今村荒男
画家 生田花朝
新日本放送局 顧問 岩崎愛二
伊藤株式会社 社長 伊藤菊次郎
川柳人 石原青竜刀
呉紡績 岩本一二
川柳人 伊志田孝三郎
堺商工会議 伊藤道次
川柳人 品川陣居
香川県川柳社 会長 岸本水府
川柳人 亀井晟修
山之内製藥 久保田孝
元衆議院議員 川上嘉市
河童ペンクラブ 主宰 黒田一角
ピアニスト 金澤孝次郎
劇作家 川村花菱
元衆議院議員 河盛安之介
早稲田大學 講師 加茂正一

近畿不動産 金岡真一
画家 木村杏園
關西藝能倶楽部 專務理事 本庄栄次郎
川柳宮城野社 主宰 濱夢助
關西藝能倶楽部 專務理事 菱田正男
津山川柳社 主宰 橋本晴の助
宗教家 池澤楽居
長崎川柳社 池田可宵
大阪市南區 醫師会長 飯島近治
守口市長 井上七郎
しなの川柳社 石曾根民郎
画家 生田花朝
京都川柳社 紀二山
川柳研究社 主宰 川上三太郎
大阪府 醫師会長 湖崎精一
吹田市長 木村熊次郎
川柳野岡会 主宰 北村白眼子
劇作家 食満南北
大阪市史 編纂室 川端直正
川柳人 金子呑風
香川県川柳社 川村伊知呂
員塚市長 北野彌一郎
川柳人 前田伍健
松下電器産業 重役会長 松下幸之助
大阪市立 美術館長 望月信成
川柳人 前田雀郎
川柳きやり吟社 主宰 村田周魚
市大教授 經濟學博士 宮本又次

石川縣 作家連盟 森下冬青
八尾商工会議 松永憲二
草和田市長 毛利一郎
画家 米良道博
關岡川柳倶楽部 主宰 松崎笑三郎
大阪市長 中井光次
作家 野村胡堂
大阪府議 中田守雄
横濱川柳社 主宰 中野懐窓
歌人 長野晴濱
大阪府立 図書館長 中村祐吉
都山流家元 中尾都山
汐風川柳会 長野文庫
京大教授 文學博士 中村直勝
歌人 西村酔香
川柳社人社 主宰 新田川草
信貴山警長 野村密全
毎日新聞 學藝部 永井正三
泉木市長 中谷光
產經・大阪府 聞 文化部長 中谷・清
大阪茶所 西濱聖
作家 沖野岩三郎
詩人 小野十三郎
劇作家 大西利夫
せんば川柳社 主宰 岡橋宣介
阪田高島屋 大阪支店 岡本振作
大阪市立 東北川柳会 主宰 大谷五花村
川柳隨想吟社 主宰 大島濤明
川柳人 岡田鹿の子
豊岐川柳社 越智伽藍

堺市長 大塚正
富田林市長 尾崎茂一
弁護士 白川朋吉
画家 柴谷宰二郎
鯨本放送局長 醫學博士 民俗研究家 島浦精二
ふあうすさ 川柳社 沢田四郎作
カリーボクン ブラッボクン 楫元紋太
白崎都香佐
調酒乳粕 佐々木国綱
ふあうすさ 川柳社 三条東洋樹
參議院議員 佐藤義詮
さつき川柳社 主宰 坂澄風
画館川柳社 鈴木青柳
大阪商工会議所 会頭 杉道助
布施市長 鈴木義仲
千日土地社長 白井信太郎
高槻市長 阪上安太郎
川柳人 篠原松雨
寝屋川市長 白井幾太郎
川柳人 庄萬よし
画家 田村孝之介
産經 大阪府 聞 文化部長 鳥山一歩
香川県川柳社 主宰 敦賀谷夢楽
元滿鉄理事 武部治衛門
川柳人 月原宵明
醫學博士 高安六郎
川柳人 高須唖三味
南大阪新聞 社長 田中予章
山陽新聞 重役会長 谷口久吉
立川商事社長 立川俊武
枚方市長 寺島宗一郎

川柳人 高峰柳児
文學博士 歌人 土岐哀果
駒本大學教授 川柳人 田中辰二
長野自動車 取締役社長 多喜健一
川柳きやり吟社 塚越迷亭
提琴家 辻久子
靖葉家 高尾亮雄
豊中市長 塚本重蔵
阪大工學部 工學博士 土田盛一
池田市長 武田義三
山陽新聞社 編集局長 宇野善三
元大阪市 教育委員長 脇田勇
道頓堀川柳会 脇田梅子
日本音楽 著作權協会 渡辺忠正
八尾市長 脇田幾松
川柳人 安川久留美
卓球家 山本雨迷
古句研究家 山路閑古
画家 矢野橋村
歌人 安田青風
陸軍大教授 歌人 安田章生
泉大津市長 安井伊三郎
画家 山口艸平
歌人 吉井勇
灌谷寺住職 吉原寛樹
川柳人 米澤曉明
画家 米田三男之介
川柳人 吉川亜人
海運 常務取締役 吉田卯之吉
泉佐野市長 山本章平
松本放送局長 横尾克己

# 編輯局にて

★逐号好評なので、勢い原稿もフクソウする。編輯部としてはうれしい悲鳴である。★MSAの援助はないが本号から採算無視して四ページを増頁、寄稿家の御好意に酬い且つは愛読者の渇を慰することにしたので一層の御愛読を祈る次第であるが、愛読者側からも、皆様の柳誌として読者の倍加運動ぐらいは起して、鼻いきの荒いところを示していただきたいものである。★昨年の八月号以来、表紙は米田三男之介画伯を煩わしている。本号の狸など傑作中の傑作である。★句評が二回続いたので本号には久々に座談会の記事を発表することにした。亜鈍、没食子、豆秋、文蝶、潮花の諸君に「川柳を通して二号の種々相」と云うテーマで語つてもらつた。そして今回は私も参加した。時間がなかつたので十二分には語れなかつたが、読物としては面白いだろう★東野大八氏の「人間横丁」は読物中の圧巻である。切に御愛読を祈る★前号で私の句集「旅人」の刊行が発表されると、真にこれこそ多年待望していた句集であると、早速申込んで下さつた方々や、前号のこの欄で、相当に売れないでは世話して下さる方々に迷惑をかけることになるからと案んじていると云う記事を読まれて、その心配はいらないだろう。多数に路郎ファンもあることだし、私もファンの一人だと云つて、いの一番に申込んでいただいた方があつて、感激している次第であるが、選挙と一緒で売切れるまでは安心が出来ない。まだ申込んでいられない方々はドシ〳〵申込んで下さるよう特にお願いしたい。もう装幀などは秋の作品で多忙な田村孝之介画伯が早速と快心の作を寄せられたので感激している★私は九月十九日から又旅へ出ることになつた。二十日に岡山県弓削町で開催される西日本川柳大会に招かれて行くのが主なる用件である。ホンの二三日の旅だがそれまでに片づけておかねばならぬ仕事で多忙をきわめている。この大会から帰阪した頃には本号が出ると思うと楽しい忙しさでもある。（路）

## 不朽洞会から

▼井上湧三博士（大阪市）は八月初旬に札幌市で開かれた全国公立病院長会議に出席、北海道各地を巡り多くの佳吟を収められた▼鳥山一歩氏（西宮市）は令息が親譲りのテニスの天才の卵なので日本一を生むために懸命だとのこと▼黄瀬美秋氏（滋賀県）からの通信によると「貴生川も水の暴威にさらされましたが少々浸水した程度で柳人には被害はありません多羅尾、信楽の被害は目を覆わせるものがあります」と▼前田伍健氏（松山市）は八月中各地の夏季大学へ川柳の出講をされ九月中旬以後には宇摩郡の渓谷地へ名付親として出向かれるとのこと▼麻生路郎師は八月十五日に湯郷温泉かつらぎ旅館に宿泊、その夜は棚原鉱山の寮で柳話、夜の九時からは大会の前夜祭に、翌十六日は納涼川柳大会に出席、その夜は美作町北山の仙坊居に一泊、夜潮氏等と柳談された▼中島生々庵博士は堺水旅館開設記念川柳大会の帰りに路郎師夫妻を諏訪森の自宅に迎え、盃を傾けられた▼岡村牛耕氏（岡山県）は十群ばかり蜂を飼つていて、日曜には庭先の蜂舎の羽音を聞きながら句作に耽つていられるとのこと▼八木摩天郎氏（堺市）は毎日のように不朽洞へ顔出しをして、路郎句集の刊行事務に敢闘されている▼浜田久米雄氏（岡山県）は五月十二日から岡山市では公式の会合以外禁酒を断行されていたが、九月二日肝臓のはれていることが判つたので当分晩酌も廃することになつたとのこと▼村松夢裡氏（京都市）は八月廿八日に京大附属病院外科に入院された手術をされるのであるが一日も早く退院されることを祈つている▼本田惠二郎氏（岡山県）は八月の湯郷温泉の納涼川柳大会が出席者が百五十六名、投句者九十六名と云う大会へ病気を蹴飛ばしての出席、名司会者の名をほしいままにされた▼松江梅里氏（大阪市）は八月十五日湯郷温泉かつらぎ屋に一泊、岡山県下の柳人と歓談、翌十六日の大会に出席後、即夜帰阪された▼犬森風来子氏（岡山市）は延永忠美氏と共に、八月廿九日に長島愛生園へ川柳慰問に行かれた、なお風来子氏は九月六日に来阪、不朽洞に路郎師を訪ね没食子等と歓談され、その夜、公用で金沢へ出張▼服部十九平氏（岡山市）は全国世話課長会議へ出席のため八月廿三日上京された。氏は又玉野市の保健協会の機関紙「すこやか」の新設柳壇の選を担当されることとなつた▼村松夢裡氏（京都市）は肺の中に腫物が出来たので近く京大の附属病院へ入院青柳博士に手術をうけられる予定だと八月廿六日附でおたよりに接した▼築山快夢起氏（ホノル、市）一番暑い八月（八十六度）がこれまでの最高）も貿易風のために割合に凌ぎよい、同人一同健在とのこと▼政田大介氏（岡山県）は八月末に離床され、飲んだら絶対に乗らぬと云う誓約書をオフクロに入れてスクーターを買つたとのこと▼上林粗影氏が家事の都合で八月限退会された▼布村南扇子氏は通信不能になつたので会員名簿から抜く。

### 新會員紹介

九月

平尾太希志（大阪市）正
海野比呂史（大阪市）正
以上　生々庵氏推薦
木口賀峰（大阪市）正　梅里氏推薦

大阪名菓
山本かしかわ屋
源氏ものがたり
百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話⑥三四〇九

避妊には…
ゼリー剤を！
★落ける時間がいらず速効且つ確実で連用しても無害
★注入器で深部へ送るか、タンポンに盛り御使用を！
サンシーゼリー
山之内
1姫 2太郎 3サンシー

## 川柳不朽洞會

**指導**

木村孤浪　戸田古方　麻生路郎　水谷鮎美

**賛助**

池沢楽居　西尾栞　市場没食子　長谷川一徹

―維持會員―

長野晴浜　福田山雨楼　藤村作　寺井鋭々　中田守雄　前山北海　白川朋吉　古川魔花麗　中村祐吉　内藤草一郎　高安六郎　藤村雅光　田中辰二　大坂形水　岩崎愛二

**洞友**

鳥山一歩　宮田不二　沖野岩三郎　西垣錦風　亀井晟修　川村好郎　田村孝之介　築山快夢　山本雨迷　永田里十九　安川久留美　高田抱逸　山路閑古　小田沙兆　吉田圭井堂　前田伍健　市岡暁舟　柴谷宰二郎　三鴨美笑　蛭子省二　林盆丘　麻生葭乃　白砂旋風

―正會員―

橋本緑雨　高鷲亜鈍　吉田水車　沢田四郎作　大西八歩　東野大八　須崎豆秋　石曾根民郎　正本水客　黒川紫香　土井文蝶　奥村丹路　丸尾潮花　小林文月　戸倉普天　北川春巣　亀山晴峯　西いわを　上田翠光　石井白面人　山根白星　家本富至　田垣方大　後藤梅志　木村千容　岩島雄歩　尾野おさむ　佐野牛歩　中島兎庵　日置文郷　井野格一　臼井呑風　山田季賛　山田鳥荘　水本無尽　水田千石　中村ただみ　路一草　内藤本茶々　谷斜水　田代尋四　田中遊星　鈴木天貧　東夏六　喜久堂　児山紫郎　飯島二桂　木村千容　岩島雄歩　田垣方大　後藤梅志

**不朽洞会員**

―特別會員―

中島生々庵　黒川紫香　土井文蝶　奥村丹路　丸尾潮花　小林文月　戸倉普天　北川春巣　亀山晴峯　上田翠光　石井白面人　山根白星　家本富至

布施筑川　瓜平　横部牛歩　那谷光郎　小池しげお　尾崎方正　渡辺孫拙　服部十九平　野村味平　竹内圭三　大森娯句楽　木村水堂　山崎帆加夫　浜田久米雄　富岡淡舟　長谷川三司　膳所新三　松村蔦古　好崎申仙　飯降白香　山中志乃布　花岡英子　藤井春日　菊沢小松園　西辻竹青　桑原養痴園　八木摩天郎　平尾太希志　逸見灯竿　長野井蛙　戌瀬月仙　福田丁路　海野比呂志　清水白柳子　林野甦光　足立春雄　佐々木告天子　若林草右　水谷谷水　木口賀峰　小川恒明　上田春柳　延永忠美　岡田夜潮　中谷仙坊　坂井三葉　政田大介　中山中納言　臼井三林坊　岡村牛耕　稲葉鳩花　下山清潮　本田恵二朗　真鍋一瓢　村田一哲　牟田一哲　河村瑞川　河村日満　木村無名林　松川杜的　馬場夢生　永田六竜子　村上ゆづる　森本法泉子　青柳扇子仙　安倍寛子　石川侃流洞　坂田良坊　岸南柳　松井可笑　大森苑女　松江梅里　岡島嶺泉　大森風来子　武部香林　徳永雅美　森下愛諭　浜畑胡蝶　阿形一杉　浪玲之介　友淵貴山　地倶山風楼　福田妄夢　丸山弓削平　安岡珊枝郎　長谷川迷路　木下幽王　黒田笑泉　南捨舟　黒木弾正　下山清潮　石岡正司　水谷竹荘　小橋隆如　西森花村　弘津柳慶　高田圭井堂　吉田沙兆　小田沙兆　山路閑古　市岡暁舟　杉谷湖山　増田耕民　国弘半休門　佐野卜占　西口如川　大倉四案　益永貞女　藤原虚水　藤本満年　黄瀬美秋　家沢莽花　田中鳥耕　佐野牛歩　尾野おさむ　岩島雄歩　後藤梅志　木村千容　石井白面人　上田翠光　戸倉普天　奥村丹路　中島生々庵

## 募集

### 課題吟募集

思い出（廿句）正本水客選
バスガール（廿句）富岡淡舟選
（十月二十日締切）
履歴書（廿句）武部香林選
風邪（廿句）丸尾潮花選
（十一月二十日締切）

### 毎號募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）
（毎月廿日締切）

### 投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る
▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第八卷　第十号
定価　四〇円（送料四円）
半ヶ年　二六四円
一ヶ年　五二八円
昭和廿八年九月廿五日印刷
昭和廿八年十月一日発行
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
編輯兼発行人　麻生幸一郎
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇

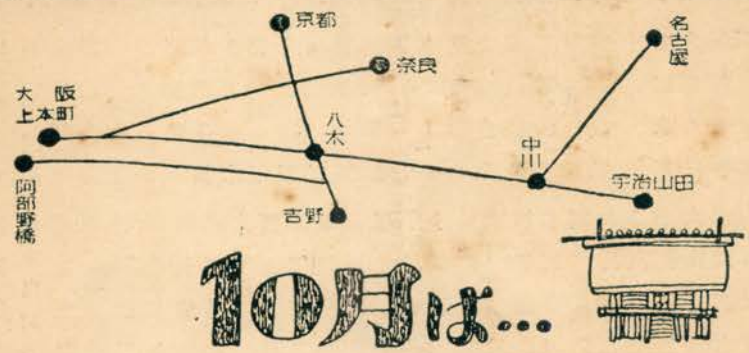
（転載禁）

昭和二十七年一月十七日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）　昭和二十九年九月廿五日印刷納本・昭和二十八年一月十日発行

# THE SENRYU ZASSHI

NO・317

Published monthly by Senryu Zasshisha. Osaka. Japan.




10月は…

# お伊勢さんの御遷宮

伊勢神宮には皇室の御先祖、天照大神をおまつりする内宮と、農業の神さま豊受大神をおまつりする外宮の二つのお宮があります。20年に一度おやしろを建てかえますが、今年の秋10月は新しいおやしろに神さまをお遷しする年にあたつています。これを式年御遷宮といい、式年とは定められた年限という意味です。この制度は持統天皇の５年から1260年にわたつてつゞきこんどで５９回目です。

この度の御遷宮は昭和24年に行われるところを、戦争のためにおくれておりましたが、新しいおやしろは昭和27年の春から建てはじめ28年の10月２日に内宮、同じく５日に外宮の御遷宮が行われます。

今までは国家がまかなつていましたのを、今年はいつさい国民の手でやりとげることになりましたのも、たいへん意義深いことと申せましよう。20年に一度の国民的なおまつりにぜひ御参り下さい。

**福引つき参宮記念乗車券発売中**

景品　高級テレビ・電蓄・ラジオ　ほか（御神材の門標もれなく進呈）

発表　10月20日付朝日新聞紙上

発売所　大阪 名古屋 近鉄主要駅及案内所・日本交通公社・近畿交通社

**御遷宮ご参拝には早くて便利な近鉄を・・・・**

近畿日本鉄道は大阪・名古屋・宇治山田・奈良京都を結ぶ日本一大きな私鉄です。座席指定の特急をはじめ全線に増発運転して、みなさまのご利用をお待ちいたしております。

**近畿日本鉄道**